

わが友、村田渚

序章

二〇〇六年の十一月十二日。

僕にとつて、この日は一生涯忘れる事の出来ない日となってしまった。

そろそろここ数年、構成、編集を手掛けている経済誌『グローバルヴィジョン』の次月号に取りかからねばと考えていた頃の夕刻、お笑い芸人の佐野忠宏さんから携帯電話が入った。

「甘井さん、佐野です」

「やあ、久しぶり。元気だった」

そう僕は答えたが、どうも電話の向こうの彼の様子がおかしい。不意に寒気がした。

「甘井さん、今から僕が言うことは、大事なことですから、落ちついて聞いてください」
寒気が嫌な予感に変わる。

「渚さんが死にました」

頭の中が真っ白になった。

「えー！ 嘘だろー！」

その言葉を佐野さんに返すまでに数十秒を要した。嘘でこんな電話がある訳がないと分かっては居ても、反射的にそう返してしまった。佐野くんは落ち着いていた。無理もない。後で聞けば、つ

い先程まで荏原警察にて色々話を聞かれていたそう。誰よりも早く渚くんの死に向き合われ、一番大変なところを彼は務めたのだ。僕にはつきりと渚くんの死を伝えるために、彼は敢えて「亡くなった」ではなく、「死んだ」という言葉を用いたのだろう。

彼から倒れた渚くんを発見し、警察に連絡したこと、警察での事情説明が一段落し、やっと僕に電話を掛けられたというのを説明された。そして明日まで警察の規則によって誰も渚くんに会うことは出来ない聞いた。

「すみません、甘井さん。僕はまだこの事を伝えなくてはならないところがありますから、一度電話を切ります」

そう言って、佐野くんからの電話は終わった。

静寂の後に、僕の動悸が激しくなってきた。心臓の鼓動が明瞭な音となって聞こえているような感覚だった。今でもこの日のことを振り返ると、再びドキドキと胸が苦しくなる。

自分の鼓動を聞きながら、僕はまだ現実を受け容れられないで居た。茫然自失とは正にこんな状態を指すのだろう。数十分、椅子の上で身動き一つ出来なかった僕は、ようやく佐野くんが最後に言った「この事を伝えなくては」という言葉を思い出して、旧友たちに連絡を取ろうと体を起こした。

双葉社という出版社が『マニッシュ』というアイドル誌を出版していた頃、僕は雑誌のデザインの外注先だった。そこで知り合ったのがカメラマンの河村正和さん、ライターの富田陽美さん、篠崎美緒さん、漫画家の浜口乃理子さんだ。やがて「ボキヤブラ天国」というお笑いのブームが来て、『爆笑王』というお笑いタレントだけの別冊も数回刊行された。河村さん以外とはここ数年、やや疎遠になっていた。久しぶりの電話が、こんな事を伝える事になってしまった……という事すらこの時は考える余裕も無かった。

河村さんはお笑いの最前線で活躍されているカメラマンで、渚くんの新しいコンビである『鼻エンジン』の活躍ぶりを何よりも楽しみにしていたひとりである。お笑いの業界と仕事を通じて接する機会の無くなっていた僕にとって、いつも最前線の情報源は河村さんだった。

「何でこんな事に。もっともって面白くなって、これから活躍するはずだったコンビですよ！」

河村さんの言葉は怒気を帯びていた。こんな運命に渚くんを巻き込んだ神様の失態をなじるように。売れっ子カメラマンである彼に、荏原警察で渚くんと会えるという時間を伝えると、どんなことをしてでも行きます、と返してきた。

富田さん、篠崎さん、浜口さんにと電話を続けた。誰も、

「久しぶり、どうしたの？」

と、佐野くんの電話を受けた僕のような反応で、僕が悲しい事実を伝えると、三人とも電話の向こうで号泣していた。

一通りの連絡を終えると、この酷い現実が、僕の肩に重くのしかかってくる。何かしなければと考えた僕は、後で考えてもおかしな話だが、知人のヘアメイクに電話を掛け、急かして事務所兼自宅のある南麻布まで来て貰った。そして伸び放題になっていた頭髪を全部切って貰い丸坊主となった。その時の僕自身の心理状況は今でもよく分からないのだが、自分に出来る渚くんへの弔意はそれしか思い付かなかったのだろう。頭を丸めると、喪服を着て僕はタクシーに乗った。佐野くんからは明日にならなければ誰も渚くんに会うことは出来ないと言われていたが、それでも荏原警察の前まで行った。行かなければ気持ちの収まりが付かなかった。あたりはすっかり暗くなっていた。

タクシーを降り、荏原警察の正面玄関の階段を上ると、そこにはライターの富田さんが居た。彼女とはかつてフォークダンスDE成子坂のライブ『自縛』関係の仕事で何度も打ち合わせをした。フォークダンスDE成子坂には人一倍思い入れの強い彼女も、この場所に来ずには居られなかっただろう。

「私、どうしても明日来れないの」
目を真っ赤にして彼女は言った。
受付に居た警察官に何度も聞いたが、規則は規則であり、誰も霊安室へは入れないとの一点張りだった。

「霊安室はどちらの場所ですか？」

僕は再び警察官に聞き、彼が指さした方向を向いて両手を合わせた。まだ実感として彼の死を受け容れることが充分には出来ていない僕だったが、そうして渚くんの顔を想った。愛すべき悪戯っ子のような渚くんの笑顔を想った。

涙に暮れる富田さんと荏原警察の玄関で別れ、タクシーを拾い僕は南麻布へと引き返した。自宅近くに差し掛かったとき、僕は運転手に告げた。

「このまま真っ直ぐ行って、麻布十番商店街に入ってください」

僕は思っていた。ついふた月ほど前に渚くんと双葉社の原田秀司さんと三人で麻布十番で飲んだ事を。

『狼庵』という店だった。

タクシーを降りて、地下にある店の階段を頼りない足取りで下りていった。

「甘井さん、どうされました？」

マスターの三井さんは驚いた表情で僕に問い掛けた。無理もない。いきなり丸坊主だし、目は真っ赤、おまけに喪服姿だ。

マスターに事情を説明し、無理を言っ、奥のボックス席を一人で占領させて頂いた。詰めれば六く七人は座れるだろうスペースだが、この日ばかりは三井さんの厚意に甘えた。スコッチを二つ頼んだ。勿論ひとつは渚くんの分だ。

この店で飲んだとき、いい雰囲気のお店ですね、と気に入ってくれた渚くんは、いつもはウーロンハイや焼酎を飲むのに、僕に付き合ってくれて僕の好きな「アードベック」というスコッチウイスキーを美味しい美味しいと飲んでくれた。二人じゃボックス席が寂しいと、双葉社で現在は増刊大衆の編集長にまで出世した原田秀司さんと呼んだ。

「あまちゃん、忙しいんだから勘弁してよ」

と言いつつも、僕より一つ年下である彼は僕の無理をよく聞いてくれる。彼は昔から仕事の良く出来る男だった。フォークダンスDE成子坂の『自縛』シリーズのゼネラルプロデューサーだった人物だ。

渚くんと同田さんと僕で、狼庵での夜はまるで『自縛』のプチ同窓会のような雰囲気だった。渚くんの現在の活動を原田さんは聞き、ウチの雑誌で連載を持ってよ、と話した。この約束はその後、雑誌『パパラッチ』で渚くんが一番親しかつた後輩の佐野忠宏（現・寿司^{しゅし}）が連載を持つという形に変わって果たされた。『自縛』の思い出話は尽きなかった。僕も原田さんも若く、考えるより先に身体が動いていた時代だ。そして、渚くんが誰よりも光っていた時代だった。

「もう一度、あの頃を超えなきゃね」

僕も原田さんも何度も渚くんにそう言った。

「はい、見といてくださいよ」

自信に満ちた声で渚くんは返してくれた。

その日は本当に楽しかった。

朝方まで三人で大笑いを続けた。

その時に渚くんの座っていた席にグラスを置き、僕は心の中で、

「何だよ」

と呟いた。もしかしたら声に出していたかも知れない。

「何だよ、渚くん、何だよ」

じつと渚くんの席のグラスを眺めながら僕は二杯飲んだ。

僕は狼庵を後にした。上気した身体に夜の風が沁みた。とぼとぼと僕は歩いて家に戻った。僅か二カ月でこんな事になるなんて。僕は神様を恨んだ。

なかなか寝つけなかった。翌日は渚くんのお母さんとお会いすることになるなあ、と考えた。父親を幼い頃に亡くしている渚くんにとって、お母さんとの絆は、また特別なものであったろう。一度渚くんが交通事故によって入院している頃、渚くんのお母さんにはお会いしたことがある。でも明日、僕はどんな顔をして会えば良いのか、戸惑った。僕は寝るのを止めて、朝方まで昔の資料をひっくり返して渚くん関連の物を探した。一つだけ、『自縛』のビジュアル関係を担当していた事もあって、パッケージに使われたイラスト原画で、未使用となっていた物を発見した。諸事情で本来

とは違う使われ方をし、僕が原画を保管していた物だ。イラストは文部大臣賞も受賞されたことのある森田さんの手による物で、当時僕の周りにいた最高のスタッフたちで何度も打ち合わせをし、イメージや構図を決めて作った思い出の作品だった。外はもう明るくなっていった。僕はこの原画を額装して持つて行くことに決めた。渚くんが一番光っていた頃の作品だ。彼の側にあるのが一番の筋であろう。

翌日となって再び荏原警察を訪れた。警察の周囲には大勢の芸人さんたちが集まっていて、異様な光景だった。佐野くんにも会い、

「大変だったね」

と声を掛けた。

「今、凄く気が張っているから大丈夫です。油断したときが怖いけど。それより松つん(松丘慎吾)の方が心配で」

と、佐野くんは松丘くんを気遣っていた。

今にして思うと、渚くんを見付けてくれたのが佐野くんて本当に良かった。彼以外考えられなかった。例えばマンシヨンの管理人や大家に彼が発見されていたらと考えるとぞっとする。無神論者だった僕だが、こればかりは渚くんが佐野くんを呼んだとしか考えられない。

佐野くんは松丘くんを紹介された。不明の致すところだが、何度か顔を合わす機会があったのだ

ろうが、松丘くんと話をするのはこれが最初だった。『自縛』以降、マニッシュ、爆笑王の休刊でお笑い関係の仕事をする機会が無くなっていった僕にとって、渚くんや佐野くんとの付き合いは極めてプライベートなものであり、お酒を飲まない松丘くんとはなかなか接する機会がなかった。

「大丈夫？」

と声を掛けると、

「僕は大丈夫です。ご家族の方がもっと大変ですから」

と気丈に返してくれた松丘くんだったが、目は腫れ、顔は青白く、誰が見ても大丈夫な雰囲気では無かったことを記憶している。

『自縛』時代のフォークダンスDE成子坂のマネージャーであった門間健一さんや渚くんの先輩の河野靖(現・かわのをとや)さんとも再会した。まさかこんな形で再び会うとは思わなかった。

荏原警察のロビーに入ると、長椅子に渚くんのお母さんが座っていた。直ぐに分かった。

「甘井といいます。渚くんとは友達でした」

そう挨拶して、渚くんのことを話しはじめた。

渚くんがお母さんに話したエピソードに、僕も心当たりのあるものが幾つかあった。お母さんに、その時僕も一緒に居ましたよ、と伝え、その時の渚くんの様子を話した。

河村さんも仕事のスケジュールをキャンセルして駆け付けた。フリーランスの人間にとって仕事

をキャンセルすることがどれほど怖いことか僕は良く知っている。河村さんの男気を感じた。

在原警察を取り巻く芸人さんたちの集団は益々増えていった。芸能音痴な僕でもTVで見かける大物芸人さんたちも居た。しかし、予定の時間を過ぎては渚くんとなかなか会うことが出来なかった。三重の実家からはお母さんとお義兄さんが来られていた。椅子に座って悲しみに打ちひしがれるお母さんを守るように、鬼気迫る表情でお義兄さんは色々な確認作業をされていた。本当に立派な姿だった。

お母さんと渚くんの話をするうちに僕も涙が止まらなくなった。渚くんが居なくなってしまうことをとうとう実感せざるを得ない瞬間が近づいてきた。

お母さんに寄り添って、警察の横を大きく周り、霊安室に入った。僕はお母さんと一緒に先頭で入った。色々な方が居られたにもかかわらず、でも、それだけは身体が止まらなかった。

「こんな事になって」

とお母さんが泣き崩れた。お母さんの横で僕もただただ涙が溢れ続けた。さっきあれほど泣いたのに後から後から、身体がおかしくなったように涙が溢れ続ける。渚くんの顔は安らかだった。それが唯一の救いだった。

もっと彼の活躍を見る筈だった。もっと彼と飲んで馬鹿話をする筈だった。時にはお互いが所属する業界について深く語り合う筈だった。

だが、それは一晩で永遠に叶わぬものとなってしまった。

そんな訳などないのだが、心のどこかで嘘であって欲しいと思って居た。だが現実は目の前にある。滲む視界で彼の顔を凝視し続けた。堪らなくなった。僕も泣き崩れていた。あんな状態になったのは後にも先にもこの時だけである。身体の震えと嗚咽が止まらなかった。

どの位の間そこに居たのか思い出せない。係の署員に促されるように僕は外へ出た。

しばらくは立ち尽くしたままで顔を隠すようにして嗚咽を抑えようとしたが、それは無駄な努力だった。芸人さんたちの列はいつ果てることもなく続いていた。みんなが一樣に泣き続けていた。迷惑なのは承知の上で、僕はもう一度列の最後尾に並んだ。どうしても渚くん最後の言葉を掛けたかったからだ。

再び渚くんを前にして、最初よりは少し落ち着いた僕は、

「ありがとう」

と彼に声を掛けた。その言葉しか思い浮かばなかった。

渚くん。君と出会って、僕は本当に良かったと思います。いっぱい笑わせて貰いました。お笑いという業界がどれほど大変で緻密な計算が要るものか初めて知りました。君と飲む酒は本当に楽しかった。佐野くんと三人で飲んだときには特別に楽しかったです。君が僕の事務所に来て一晩中素

面で語り明かした夜を僕は一生忘れません。いずれ僕もそっちに行くでしょう。その時には、よう頑張りましたね、と君に言つて貰えるように、もう少しこつちで足掻いてみます。そして、君の大切にしていた人たちを少しでも応援したいと思います。さようなら、わが友、村田渚くん。

渚くんを乗せた車は、お義兄さんの運転で一路、故郷の三重の加太へ向かい、去つて行つた。

そして、僕は今、渚くんとの付き合いのことを書いておこうと思っている。本当なら渚くんがいつかテレビやラジオで話したかも知れない事。そして、それを笑いながら見てたであろう僕。それが叶わなくなった今、少しでも彼の一面を知つて貰えれば、僕と渚くんの付き合いは意味を持つと思う。デザインや編集の仕事をしている僕にとつて出来る事はこれしかない。真っ先に渚くんのお母さん、お姉さんに読んで貰いたい。彼がどんなに頑張つていたかを。そして渚くんが本当に大切にしていた人たちにも知つて貰いたい。僕が見てきた渚くんの姿を。

「お笑いこそ最高の庶民娯楽」

これは渚くんが僕が教えられたことだ。

彼と出会つて、僕の人生は豊かなものだったと断言できる。

ありがとう、渚くん。

渚くんと出会うまで

最初に僕自身のことを少々。僕は昭和四十二年愛媛県生まれ。十八歳まで愛媛で過ごした。三歳からの幼馴染みはテノール歌手として活躍する秋川雅史さんだ。大阪府立大学に進学したが、バンドに夢中になってしまい、学校を辞めて音楽の道を志したが、挫折した。この頃にバイトとしてデザイン事務所に勤め、結果的にそれが今では僕の職業となっている。人生はどう転ぶか分からないような見本である。

商都大阪には「出版文化」というものはほとんど存在しない。大阪時代は主に広告の仕事が中心だった。デザイン事務所ではチーフ格となっていた僕は、別の会社に引き抜かれたのを切っ掛けに、二十七歳で東京にやって来た。

元来が愛媛の田舎者だった僕にとつて、東京は魅力ある街だった。だが、ほとんど知り合いも居ない中で、東京での仕事は難渋を極めた。上京して二年、僕の所属する会社は東京支社の閉鎖を決め、僕は東京に残ることにした。極めて消極的な独立である。

恵比寿の「恵比寿参番館」という賃貸マンションに引越し、僕は「オフィスあまちゃん」という屋号でデザイン事務所を始めた。二十九歳の時だ。僕は甘井という名字から「あまちゃん」と呼ばれることが多く、それをそのまま事務所名にした。最初の頃は前の会社の残務整理など、なかなか

仕事にならない雑務に追われ、将来は暗澹たるものであった。

しかし、ある時に僕の作った広告が、双葉社のアイドル誌『マニッシュ』に掲載され、それを気に入った編集部の方が僕をレイアウトに使ってくれるようになった。これはありがたかった。広告と違って本誌のレイアウトは数をこなさねばならない。当時の一ページのデザインギャラは一万五千円で、どんどん仕上げていかないと発注も来ない。広告デザインの世界にいた僕だったが、この時期に仕事のスピードの大切さを痛感した。この経験は今でも大いに役立っている。

当時、双葉社の広告部に居たのが原田秀司さんだ。かれはブームとなったお笑いに目を付け、企業とお笑いのタイアップ企画を次々と成功させていた。原田さんとフォークダンスDE成子坂のマネージャーだった門間健一さんとの企画で誕生したのが有名な『自縛』シリーズだ。マニッシュの中で「お笑いFREAKS A G O G O」というお笑いのコーナーのデザインを手掛けることが多かった僕が、自縛のビジュアルイメージ制作を任されることになった。原田さん、門間さんとは、これが切っ掛けで深いお付き合いをするようになった。

マニッシュでお笑いの仕事をしていたので、フォークダンスDE成子坂の事は当然知っていた。当時は「ボキャブラ天国」という番組が人気で、玄人好みのフォークダンスDE成子坂は他の出演者と比べても頭一つ抜けた存在で、僕のお気に入りだった。

その頃僕がよく通っていた居酒屋のマスターの平野雄二さんが、渚くんによく似ていたので、いつも、

「平野さんはフォークダンスDE成子坂に似ているよねえ」

とからかったりしたものだ。

そのフォークダンスDE成子坂の仕事に携われることとなって、僕は少し浮き浮きしていた。マネージャーの門間さんは愛社精神の強い人で、原田さんと僕とは彼のことを「ミスターホリプロ」と呼んだ。三人で飲むと、いつも門間さんはフォークダンスDE成子坂がいかにかを力説していた。

「天才なんですよ、あの二人は」

酔い潰れることの多かった門間さんだが、いつも最後にはこう話してくれた。

自縛のタイトルロゴをデザインする時に原田さんが、

『ハジメ人間ギャートルズ』って漫画があつたでしょう？ あんな感じで行きたいんだよね」

と提案し、ロゴが完成した。

マニッシュはボキャブラブームを受け、『爆笑王』という別冊を創刊した。ホリプロのお笑いではフォークダンスDE成子坂に次いで人気のあつたアリtoキリギリスと一緒にフォークダンスDE成子坂は表紙も飾った。この時に撮影をしたのが、今やお笑いの世界では有名人のカメラマン河村正和さんだ。この時の写真を使って僕が爆笑王のポスターを制作し、爆笑王の宣伝や、自縛の会場等にも張り出された。

爆笑王には自縛第一弾の告知広告が掲載され、チラシも制作された。この時にポップなイラストのシリーズのビジュアルイメージで行こうと提案したのは僕だ。イラストレーションのプロダクションとして有名だった「パステル」という会社と組んで、売れっ子だった森田さんから桶田敬太郎さんの、数回の打ち合わせの末、ビジュアルイメージは固まってきた。門間さんから桶田敬太郎さんの趣味が釣りだと聞いて、釣りのイメージも追加した。この一連の広告ビジュアルが好評で、ビデオのパッケージにも使用された。プロダクションの労に敬意を表して、クレジットにはパステルの名を入れて貰った。

そしていよいよ、『自縛』はスタートした。広告ビジュアル等の裏方である僕は気楽に客席から見る事が出来た。明治乳業やアトラスなどの大企業が公演のスポンサーに付いた。これは原田さんの力による所も大きいですが、当時のフォークダンスDE成子坂にはそれを納得させるだけの勢いが

あった。僕も原田さんの手伝いで、開場を待つ人たちに明治乳業の飲むヨーグルトを差し入れて配った。

じっくりと見るフォークダンスDE成子坂の単独ライブは想像以上の面白さだった。何よりも凄いののは、今このビデオを見返してみても、やはり面白いということだ。時代に左右されない普遍性を持つ笑いをフォークダンスDE成子坂の二人はこの時点で作り上げていたのだ。門間さんのいう通り、まさに早熟の天才たちであった。

公演の打ち上げの居酒屋で、僕は初めてフォークダンスDE成子坂に門間さんに紹介されて挨拶をした。プロモーション関係のビジュアルを担当してくれている甘井さんです、と僕が紹介されると、渚くんはあの独特のちよつと鼻に掛かった声で、

「そうですね、よろしくお願いします」

と返してくれた。笑顔が印象的だった。

それまでもタレントさんに挨拶をする機会は多かった。そしてそれだけの接点になることがほとんどだった。裏方である僕は、「まあ、これだけだろう」と思い、その後は門間さんと歓談していた。それでも初めて言葉を交わした渚くんのシャイで真面目な雰囲気は記憶に残った。

とにかく、お笑いのライブでこれ程クオリティの高いものを見たのは、僕にとって初めての経験だった。打ち上げ会場は活気に溢れていた。



『自縛』会場での出演者スタッフ一同で、渚くんが音頭を取っての「お疲れさま」のひとコマ。ビールではなくスポンサーだった明治乳業の飲むヨーグルトで乾杯した

僕は麻雀が好きだ。近頃は痴呆予防に老人ホームでも採り入れられていると聞くが、本当に世界最高のゲームだと思っている。

恵比寿のとあるバーで飲んでいるときに顔なじみが、

「あまちゃん、麻雀の全自動卓要らない？」

と声を掛けてきた。何でも自分の経営する雀荘を閉めるそうで、欲しいならあげるよとのこと。ちやうど恵比寿に引越して間もなく、一部屋空いていた僕にとつて、嬉しい話だった。

翌日、赤帽を手配し、雀卓を運んだ。

初めのころは近所の顔なじみと打っていたが、双葉社の原田さんが面白がって色んなメンバーを連れてくるようになった。一気にデザイン事務所のオフィスあまちゃんは雀荘と化してしまった。この頃アルバイトに来て貰っていた女性スタッフには「煙草臭い、後かたづけが大変」とよく叱られたものだ。

渚くと僕の事務所で最初に麻雀したのは、漫画家の浜口乃理子さんと河野靖さんと僕のメンツだったように記憶している。誰が来るか事前に知らされて居なかつたので、打ち上げの席などで挨拶を交わすだけだった渚くんが僕の事務所の下アの向こうにいたときはビックリした。

「どうも、おはようございますー！」

と、真夜中だが、芸能界の慣習の挨拶で、あの人懐っこい笑顔を浮かべて渚くんが入ってきた。

「甘井さんは強いんですか？」

と渚くん。僕が、下手の横好きだよ、と返すと、

「強い人に限ってそんな事言いよるからなあ。警戒せんと」

と言つて、また笑った。

この時には「のんちん」こと浜口乃理子さんが渚くんや河野さんからかわれ続け、楽しい麻雀だった。ライターの富田さんも観戦していて、皆で大笑いし続けたことを憶えている。

佐野くんを連れてきたのは原田さんだった。聞けば二人は同郷出身という事で、初対面から賑やかな様子だった。佐野くんは物怖じしない性格で、これほど普段とステージ上が一致している人間も珍しい。そんな佐野くんだから渚くんも後輩として可愛がったのだろう。

後で聞くと、ホリプロのお笑いタレントのトップ中のトップであつた渚くんは、佐野くんにとつても雲の上の存在だったらしく、最初の頃は緊張するばかりだつたそう。それでも、

「これじゃいかん、と勇気を振り絞つて渚さんと親しくなつたんですよ。ほら僕もシャイですから」と言う佐野くん。シャイの部分は少々信用ならないが、

それでも、ちよつと人見知りなところもある僕は、この佐野くんのお陰で渚くんと親しくなつた。

それは二人がよく一緒に麻雀をしに事務所に来てくれたからだ。

真剣に麻雀を打つ渚くんと違って、佐野くんの麻雀は、あれこれ賑やかなことこの上ない。自ら「ドラマチック麻雀」と宣言し、ギャアギャア騒ぐので渚くんに、

「佐野！ 五月蠅い！」

と怒られていた。でも全然めげないのが佐野くんの良いところだ。彼を間に挟んで、僕と渚くんは親しくなっていた。

また、この頃ボキャブラの打ち上げが僕の事務所の近所の店で行われることが多く、色々な芸人さんたちが麻雀をするために僕の事務所にやってきた。中でも渚くんとはよく打ったと思う。ある日のこと、夜の十時に渚くんから、

「今から行きたいんですけど、やりませんか？」

と電話があった。聞けば鹿児島で営業の仕事があつて、今戻りで羽田空港に着いたところだという。帰って少しは休めばいいのに、と呆れつつも、よし来い、と返して朝まで遊んだ時もあった。渚くんは本当に麻雀が好きで、手作りを考えないようなドラだらけのインフレルールを嫌っていた。それは僕も同じなのだが、僕の場合酒が入ると途端に手作りが雑になる。

「甘井さん、そんなんやったら、もう麻雀じゃなくてサイコロ振ってるだけでええんちゃいます？」と渚くんに窘められる事もあった。

一度、渚くんに似ている居酒屋マスターの平野さんが打ちに来たことがあった。僕が秘かに楽しみにしていた両者の対面。

「似すぎてるよ嫌やなあ。そちらも嫌でしょう？」

そう言つて渚くんは苦笑した。

渚くんのツツコミの才能は、大人数を仕切るMCでも発揮された。ホリプロのお笑いライブでは司会を任されることが多く、鋭く的確に突っ込んで大きな笑を取る。それは麻雀でも同じだった。彼がメンツに居るだけでその場は楽しいものとなった。僕は特等席で渚くんの「芸」を見続けさせて貰った。僕の恵比寿時代の一番の想い出だ。戦績は僕の方が分が悪かったが、不思議と悔しくは無かった。

それでもゲームだから必要以上に熱くなるメンバーも居る。そんな時、渚くんは、

「せっかくみんなで遊んでるんやから、楽しいうしましようや」

と、やんわりと一触即発となった雰囲気（ばい）を解してくれた。

すっかり雀荘と化した事務所には役満を出した人の名が壁に張られ、次第に村田渚、佐野忠宏、甘井もとゆきだらけになった。それほど三人でよくやっていたのだ。壁の空いた部分には昔のベストヒットUSAよろしく色々な芸人さんたちがサインを書き残していた。このマンションは今年に取り壊しとなった。今考えると、もったいないなあ、と思う。

漫画家の浜口乃理子さんも麻雀が縁で仲良くなった。彼女の漫画にはよく渚くんが登場していた。時には僕や原田さんが登場することもあった。浜口さんからプレゼントされた単行本は、今でも大切な宝物だ。渚くんと僕と一緒に出てくる唯一の書籍。読み返すと鮮明に当時のことが思い出される。

僕らの仲間内のレベルは高かったように思う。当時遊びに来ていたプロ雀士は、今その業界のトップで活躍している。そんな中にあっても渚くんは強かった。

一度『近代麻雀』を出版している竹書房の社員さんが打ちに来た。僕と渚くんが勝って、

「近代麻雀に勝ったぞ！」

と二人で喜んだ。

しかし、翌日、事務所に近代麻雀の編集長が敵討ちにやってきた。

「ウチは麻雀で負けるのは沽券に閔わりますから」

と編集長。流石に強く、リベンジを果たされた。

「それにしても大人気ないなあ」

と渚くんと笑い合ったことを憶えている。

竹書房と言えば、ある麻雀漫画に渚くんそっくりのキャラが出てくるものがある。きっと彼がモデルだろう。硬派なキャラだった。渚くんは遊びだからといって不真面目にしたり、真剣に取り組

まない酔っぱらいなどを嫌った。だから僕と佐野くんは渚くんに度々叱られた。

「真面目にやりましょうよ」

でも、そこで決してめげないのが佐野くん。終いには渚くんも苦笑していた。

「アホやろお前」

「アホでーす。追っかけリーチ！」

「追っかけるなよ、鬱陶しいなあ」

「僕が勝つことは、決まって居るんですよ」

「誰が決めた？」

「いや、ちよつとそれは言えません」

「何待ちや？」

「言える訳ないでしょう」

「ドラマチック、ドラマチックちゆうて騒いどったから、どうせカッコ悪いドラ待ちやろ」

「渚さん、僕を見くびってますねえ。あの佐野ですよ！」

「どの佐野や！」

そんな二人のやり取りが、今でも耳に残っている。



恵比寿時代のオフィスあまちゃんでの麻雀のひとコマ
真剣に手牌を見つめる渚くん。いつも麻雀には真剣だった

フォークダンスDE成子坂解散

超満員の観衆を集めて続いてゆくフォークダンスDE成子坂の『自縛』シリーズを僕は客席から見続けていた。

やはり当時の二人の実力と勢いはもの凄く、僕は客席で呼吸困難になりそうなほど笑い続けていた。

一回目の公演では特に「駄菓子屋」というコントが気に入っている。黄色い帽子と半ズボンを着た「子供キャラ」を演じさせたら村田渚の右に出る者は居ないだろう。それ程までにこのコスチュームは渚くんに似合っていた。富田さんや篠崎さんなど、女性のお笑いライターの方々は、そんな扮装をした渚くんをチャタリングでキュートだと表現した。

第二回公演では「音楽補習」や「Bar」などのコントが記憶に鮮明に残っている。コントとしてはオーソドックスな設定と舞台周りだからこそ、かえってフォークダンスDE成子坂のふたりの異能ぶりが顕著となっていたように思う。ビデオで見る機会があれば、是非そんなところも確認して欲しい。

渚くんが舞台のことを話すと、彼はいつも照れくさそうに笑っていた。でも、

「そう感じてくれたという事は、あれは成功でしたね」

と、一つひとつのコントの出来と客席からの評価に満足している様子だった。

第三回公演では伝説の名コント「チューリップ商事」や「バリーバ船長&佐伯」が披露された。毎月開催される新宿での『自縛』の公演が、僕には楽しみでしかなかった。

僕と双葉社の原田さんは『自縛』の裏方のまた裏方として、公演が始まる数カ月前から「企画書」作りに取り組んでいた。『自縛』に多くのスポンサーを付けて公演自体の予算を豊潤なものとするためだった。主に企画書の制作は僕が行い、原田さんは大手企業との折衝を担当した。当時、まだまだ貧乏事務所だったオフィスあまちゃんには高嶺の花のカラーコピー機が無く、何度もコピーセンターに通いながら、原田さんの指示を受けて企画書の改版を行った。企画書を企業に提出したときの反応を見て、部分的に企画書は何度も手直しされた。マニッシュのアンケートデータ等からフォークダンスDE成子坂の人気を示す客観的データ資料なども作った。この時の資料は今でも大切に保管している。玄人好みというか、フォークダンスDE成子坂の人気はいつも四、五番手だったが、一、三位が目まぐるしく変わっても常に不動の位置をキープし続けているのが特徴だった。それ程多くの固定ファンが付いていたのだと思う。

双葉社の原田さんとホリプロの門間さん。この二人が居なかったら『自縛』は完成しなかっただろう。いや、もしあったとしても、今とは違う形となっていた筈だ。原田さんは若さ故のバイタリティで凄い数の企業や代理店を巡って、遂に明治乳業やアトラスといった一流企業を自縛のスポン

サーに獲得した。

そういった流れがあったからこそ、客席で笑い転げる僕と原田さんには、心中秘かな充実感があつた。

CSのチャンネル『MONDO 21』などを放送しているJICから自縛のビデオは次々とリリースされた。この時も原田さんは、このビデオをもっと売るために、レンタルビデオでは業界ナンバーワンのツタヤに営業をかけた。ちょうどツタヤの本社が恵比寿にあつたこともあり、僕もこの時には同行した。何度も恵比寿ガーデンプレイスに足を運んだことを記憶している。『爆笑王』の中に、「ツタヤお笑いビデオランキング」というコーナーを設けるメディアミックスという形で、ツタヤに初めてお笑いビデオのコーナーが設置されることとなった。切っ掛けは『自縛』なのだ。

『自縛』の公演を最後に、フォークダンスDE成子坂が解散する事を僕と原田さんが知つたのは、公演も中盤に差し掛かった頃だった。これは門間さんにとっても苦渋の決断だっただろうし、二人の関係をよく知らなかった僕と原田さんにとっても、正に青天の霹靂（かみなり）だった。

自縛の企画のスタートは、フォークダンスDE成子坂の集大成を見せるというものだった。マネージャーの門間さんは「作品」として、この二人の天才の姿を永遠に記録しておきたいという想いと、この舞台を切っ掛けにフォークダンスDE成子坂が解散ではなく、再び別の道を選ぶかも知れないという僅かな可能性を心の底で期待していた。しかし、門間さんの期待通りにはならなかった。自縛

の終盤では門間さんはフォークダンスDE成子坂の担当から外れることとなった。

門間さんの心中は今でこそ理解出来るが、この時まで、企画全体の裏方として動いていた僕と原田さんは、気持ちの高ぶりに冷水を浴びせられたような気分だった。ただ、門間さんを責める気持ちは無かった。これまでの付き合いから門間さんがいかにフォークダンスDE成子坂というコンビを愛し、ホリプロという組織に誇りを持っているか充分すぎるほど知っていたからだ。恵比寿で原田さんと二人、

「残念だね」

と言いつつ合いながら、やけ酒を飲んだ記憶がある。

その後、門間さんはホリプロを去った。彼にとつてフォークダンスDE成子坂は芸能生活の全てと言つても良い存在だった。フォークダンスDE成子坂が解散するのであれば、彼を芸能界に引き留めるものは無かった。

この事に関しては、あくまで外野守備だった僕は、その後も渚くんから直接解散の経緯を聞くことは無かった。でも言葉の端々から桶田敬太郎さんのコンビにいかにも自信と誇りを持っていたのか伺い知ることが出来た。それもあつてその事にだけは腫れ物に触るように接していたのだ。解散の詳細は後に佐野くんが色々教えてくれた。これに関しては、僕がフォークダンスDE成子坂が早熟の天才であり過ぎたための悲劇だと考えている。お笑いブームのタイミング、フォークダンスDE

成子坂がブレイクした時期、当時の事務所事情などなど、彼らを取り巻くこれらの要素が一つでも違えば、結果はまた別のものになっていた可能性は高い。だがそれが『早すぎた天才』フォークダンスDE成子坂の宿命だったのかも知れない。結果として解散することでこのコンビは誰も手の届かない、伝説のコンビとなったのだ。

それでも自縛の公演は続く。第四回公演では遂に前人未踏の不可思議な世界が展開される「キャンプ野郎なりに…」が組まれた。このコントを初めて見たときのインパクトは強烈だった。理解する理解しないの前に、強烈なスピード感で反射的な笑いと沈黙が交互に巻き起こるという、フォークダンスDE成子坂でしか味わえない世界。かつてバンドをやっていた僕は、パンクロックの衝撃に近いものを感じた。舞台上の渚くんが光っていた。彼の怒り、焦り、驚きなどのツッコミは、それがそのまま観客の驚きや焦りだった。若い芸人さんたちにもこの「キャンプ野郎なりに…」は是非見て貰いたいと思う。誰も見たことのないものを表現するという意味では、フォークダンスDE成子坂は素晴らしいアーティストだった。

この頃、僕には一つの企画があつた。ビデオシリーズとは別に、フォークダンスDE成子坂の『自縛』シリーズを記録したビデオアルバムを作りたいかつたのだ。LPレコード位のサイズで、文字通り記念アルバムとなるものを。当時一番フォークダンスDE成子坂の取材が多かつたライターの高田陽美さんが賛同してくれ、原田さんに掛け合うこととなった。しかし、もう予算配分も終わつて

いた終盤に、こんな無茶な僕の企画は通る筈もなかった。

僕はジャニス・ジョップリンの『CHEEP THRIIL』というアルバムのデザインが好きで、自縛のビジュアルイメージを決める際にもヒントを得ていた。だからこのアルバムを作ることが出来れば、表紙はそのまま伝説の名盤のオマージュで行きたいと思い、秘かにイラストを発注していた。色彩豊かで賑やかなコマ割りされた盤面の中を暴れ回る二人の姿、格好良い出来だった。

記念アルバムを作るという企画は没となったが、原田さんの努力でCDアルバムサイズのミニブックを作ることになった。富田さんが自縛全シリーズのレビューを書き、「村田渚の周辺事情」、「村田敬太郎詩集」というミニコーナーを作った。村田渚の周辺事情というコーナーは、渚くんを取り巻く人々からコメントを集めたものだ。桶田敬太郎、門間健一、アリトキリギリス・石井正則、坂道コロコロ・松丘慎吾、ピテカンバブー・佐野忠宏、号泣・島田修平、漫画家・浜口乃理子などの方々のコメントを記載した。一番小さな級数で、あまちゃんの名も載せた。このミニブックは自縛全シリーズの終了記念として、主にスポンサー関係に配布された。当初の予定とは違って、華やかに出回ることの無かった僕の一番のお気に入りイラスト原画は、その後、僕の事務所ので保管された。渚くんとの最後の別れの時に持参した、あの原画である。

フォークダンスDE成子坂をどんなコンビよりも高く評価していたライターの富田さんは、フォークダンスDE成子坂の解散が近づくと、どんどん感傷的になっていった。

「なんで解散するのよ〜」

飲んでる時など、僕が愚痴られることもあった。僕にそう言われてもどうしようもない。でも、気持ちには僕も同じだった。

五回目の公演で『自縛』は幕を閉じた。そして事実上、フォークダンスDE成子坂は解散した。東京に来るのが遅かった僕は、なんとか滑り込みで、伝説のコンビ、フォークダンスDE成子坂の最終章に間に合った。大阪の街が大好きだった僕が、思い切って東京に出て来た事を良かったと肯定できる理由の一つがフォークダンスDE成子坂との出会いだっただけだ。

お酒や麻雀が好きだった渚くんとはプライベートでの友達付き合いが始まった。が、一方で桶田敬太郎さんとは、僕には接点が無かった。

フォークダンスDE成子坂の解散と渚くんとの出会いは、僕の中ではワンセットになっている。僕を虜にした伝説のコンビ、フォークダンスDE成子坂は無くなった。そして僕は村田渚くんより深く向き合ってゆく。

一九九九年の十二月、フォークダンスDE成子坂は残ったスケジュールを消化して最後の舞台を降りた。その時の客席には藤谷拓郎（現・HEY! たくちゃん）の姿があった。

フォークダンスDE成子坂の解散後、自分の意志を貫いて音楽の道に進んだ桶田敬太郎さんと違い、渚くんは暗中模索する日々が続いていた。ホリプロからは「作家」としてその才能を活かし、裏方として事務所に残る道を勧められていた。

この頃の彼は本当に悩んでいた。

「お笑いの世界が好きですしねえ。それで舞台で『笑い』を取ることが好きなんですよ、僕は」

あくまで「客前」での笑いにこだわりの持っていた彼は、ホリプロを去り、自らの道を探し始めていた。ピン芸人としてTVに出演する彼の姿を何度か目にした。正直、フォークダンスDE成子坂のあの衝撃を受けた者としては、渚くんの隣に桶田さんが居ないことに対して一抹の寂しさは感じた。

僕はと言えば、マニッシュユ、爆笑王の休刊によって、別の仕事を探していた。『わあでい』という大阪発の個人情報誌があり、それが東京へ進出し、全国誌となることを受けて、僕は副編集長となった。わあでいのライバル誌はリクルートの『じゃマール』だった。じゃマールの休刊をチャンスと考え、全国誌となつてじゃマールの読者を獲得しようというのが雑誌の戦略だった。だから雑誌の装丁は勢いじゃマールを踏襲することとなり、表紙は女性人気タレントを起用することとなった。

副編集長として僕には忙しい日々が始まった。副編集長という肩書きはあっても編集者としての経験の浅い僕には毎日が新鮮でチャレンジの連続だった。インタビュー記事を書くことも多くなり、表紙には、さとう珠緒、釈由美子、安達祐実、柴咲コウ、平山あやといった人気女性タレントを次々と起用した。最盛期にわあでいは十六万部を売り上げた。僕にとっては充実感のある日々が続いた。渚くんにはわあでいでの連載を持ちかけたこともある。しかし渚くんの答えは「NO」だった。

「今はものを書くよりも、人前で演者として居ることの方が大事ですから」

そう言つてやんわりと断られた。

ホリプロから書き手としての道を提示され、それを拒んだ渚くんにとって、この時期に「書く」という連載には抵抗感があったのだろう。僕は納得した。

渚くんは佐野くんとも積極的にトークライブを始めた。最初は路上でストリートパフォーマンスよろしく渋谷道玄坂の109前で『笑いの大学』と題したライブだった。

あのTVに出ずっぱりだったフォークダンスDE成子坂の事を思えば、渚くんが路上ライブを行うなど、とても考えられない事だった。案の定、109周辺には黒山の人だかりが出来て、警察が駆け付ける騒動となった。

この時の観客の中に高校生の藤谷拓郎くんが居た。フォークダンスDE成子坂最後の舞台を目撃した彼は、すっかり渚くんに魅了され、俺は将来、村田渚になるんだと考え、この日のために北海

道から上京してきたのだ。

藤谷くんは大真面目にライブのタイトルである『笑いの大学』に入学するつもりだったという。大騒ぎを起こして警察署に説教をされに連れて行かれる渚くんと佐野くんは、彼にとつて誰よりもヒーローだった。彼は勇気を振り絞って、よりによってそんな場面で渚くんに声を掛けた。

「あの一、僕、『笑いの大学』に入りたいんですけど」

その言葉にぎよつとしたという渚くんは、

「あのねえ、君イ、時と場合を考えなさい」と答えた。

これから警察官に油を絞られるときに、北海道から弟子志願の高校生がやって来たのだ。しかもライブタイトル『笑いの大学』に入学したいとトンチンカンな事を言う。渚くんもさぞや面喰らっただろう。でも、そんなドラマチックな出会いがいかに彼らしい。

人柄を知れば知るほど、渚くんの周りには気持ちの優しい人間が集まるようになってきた。僕と同様に飲んだら飲まれることもあった彼は、決して聖人君子ではないが、あらゆる人に真面目に応対した。きちんと考えて、きちんと言葉を返す人だった。

渚くんはこの素つ頓狂な高校生を可愛がった。渚くんの押し掛け弟子となった藤谷くんは、渚くんの全てのライブに付いて行き、ライブのお手伝いをした。

佐野くんもホリプロを辞めていた。ピテカンバブーというコンビでNHKの子供番組などに出ていた彼だが、フォークダンスDE成子坂の解散と同日にピテカンバブーも解散した。

暫くは渚くんとユニットで、本名の佐野忠宏で活動していた彼だが、ある日、芸名を変えることを思い付いたという。

「渚さん、僕、『佐野スカイオーカー』って名前にしようと思うんですけど」

「え、『佐野スカイオーカー』？ あつ、面白いなあ、苗字、苗字か、ええんちゃう」

渚くんに褒められてこの芸名に変えた佐野くんだが、自信満々で臨んだ舞台では思いの外ウケなかつたらしい。それでも、渚くんは必死に、この芸名がいかに素晴らしいか力説したという。その気持ちはありがたかつたが、佐野くんはどんどん自分が寒い存在になっているような気がして、もういいです、と話を変えた。

渚くんと佐野くんのトークライブは嚴重注意を受けた渋谷109前から二子玉川河川敷に場所を移し、やがて中野のTWLスタジオを本拠地とするようになった。「お笑い」を続けるために客前に立ち続ける。彼のこの信念は揺るぎなかつた。こんな彼の姿勢に後々僕は影響を受けた。

ある日、佐野くんから電話があつた。

「渚さんが入院したんですよ」

「えっ！ どうしたの？」

「それが、雨の中バイクで帰宅していて、スリップして前の車に突っ込んだんですよ」

「どうなの、怪我の具合は？」

「変な言い方ですが、結構重傷ですが、元気です」

「なんだよそれ」

「いや、骨折の具合は深刻なんですけど、渚さん本人の意識はしっかりしていて、元気なんですよ」
そんな連絡を受けて、僕は大橋の東邦大学付属大橋病院に入院する渚くんのお見舞いに行った。

佐野くんの言うように、ベッドの上から、

「ああ、どうもわざわざありがとうございます」

と笑顔で声を掛けてきた渚くんの表情は明るかった。

それでも股関節の腰骨に入っている大腿骨の丸い部分が粉碎骨折したという渚くんの怪我の状況は深刻だった。

この時、渚くんのお母さんにも初めてお目に掛かった。

リハビリ等が開始され、車いすなどで動けるようになると、渚くんは、

「屋上で煙草が吸えますから」

と言って、見舞いに行ったときには病室よりも病院の屋上に居ることの方が多くなった。

「暇なんですよ、何か面白い本とかありませんかねえ」

と言う渚くんは、僕は昔から好きだった格闘技関係の本を差し入れた。僕の家は祖父、父、僕と三代続くプロレスファンで、大阪時代にアントニオ猪木さんをCMキャラクターに使っていた企業の仕事をしていた事もあり、猪木さんとも面識があった。また、縁があつてキックボクシングの道場である『ドージョーチャクリキ』の理事もしている。塩浜にあるチャクリキ・ジャパン道場開きには佐野くんにも司会もして貰った。

それまでは渚くんはどちらかと言えば格闘技は嫌いな方だったと思う。僕と佐野くんがプロレス談義をしていても、

「俺が分からんから、分かる話にしてくださいよ」

と、格闘系の話の輪には入ってこなかった。

しかし、この時がある意味チャンスだとばかりに、僕は「村田渚格闘技洗脳計画」を行ったのだ。入院生活で暇だった渚くんは僕が差し入れた格闘技の本を短期間に全て読破してしまった。そして格闘技にも興味を持つてくれた。僕は心中ニヤリとした。病院の屋上の喫煙室での話は、格闘技についての話が多くなった。

少々言い訳になるが、何も僕は自分の趣味を渚くんに押し付けようとしたわけではない。リハビリでこれから怪我と闘わなければ行けない彼に、エールを贈りたかったという意味もある。

事実、渚くんのリハビリは大変だった。電動ストレッチャーでの足の運動は激痛が伴ったという。

「怪我して色々迷惑をかけたところもありますし、はよ復帰したいですし」

「そう言いながら渚くんは懸命にリハビリに取り組んでいた。

格闘技に精通するようになった渚くんの興味は、アントニオ猪木さんに向けられた。

「今まであんまり考えてなかったけど、猪木さんって凄いですよね」

「どういうところが？」

「短い言葉やアクションで観衆の目を引き付けるでしょ。凄いことですよ」

格闘技の話をしていても、やはり渚くんはお笑いの舞台の事を考えていた。

この頃、比較的時間にゆとりのあつた佐野くんはしょっちゅう病院を訪れていた。渚くんにとつて佐野くんは本当に無二の存在だった。

渚くんの弟子だった藤谷くんは、入院で暇そうな渚くんを見て、これは僕も何か持って来なければと思い、それでも上京したての生活で、何も持つていく本が無く、思い余つて高校の卒業アルバムを持つて行つたという。

「俺に、これを見て、何をしろというの？」

と渚くんは苦笑した。

渚くんは藤谷くんを可愛がつていた。経験も何もなかった彼に、ずっと佐野くんとのトークライブの前説を任せ続けた。これが今『HEY！たくちゃん』として活躍する彼の初舞台だった。この時

の芸名『なごり雪』は佐野くんが付けたものだ。『佐野スカイウオーカー』、『なごり雪』と佐野くんのこの時代のネーミングセンスには、どうなのよ、という感じだが、彼のことで、

「いやいや、それが面白いんですよ。分かってないなあ」

と言いつ返されるだろう。

初舞台の時には、どこで話を切り上げて良いのか分からず、藤谷くんは十五分も前説をやつて袖に控えていた渚くんを呆れさせたという。

「君のライブやないんやから」

と叱られたという藤谷くんだが、その後のトークライブ全ての前説を任せ続けた。

「全部で四十六回やりましたが、四十六回の全てで滑りました」

と、現在の『HEY！たくちゃん』は述懐する。

滑り続ける『なごり雪』を外そうという意見もあったようだ。でも、渚くんは頑として使い続けた。この時の経験がなければ、芸人となれていかどうか分からないと『HEY！たくちゃん』は言う。僕も同感だ。渚くんが居なければ『HEY！たくちゃん』という芸人も存在しなかった。渚くんは芸人で多くの人に影響を与える存在だった。

僕も、彼からたまに鋭いツツコミをされ、言葉を失う時があった。

「甘井さん、その仕事はどういう目的でされてるんですか？」

たまに仕事の愚痴などを彼に聞いて貰ったとき、こう返されたことがある。

「仕事だから」

と返しても、彼は納得しない。

「そんなに嫌なら、止めたらいんですよ。金だけのためやったら幾らでも他に仕事あるでしょ？
納得してやらんとエエ仕事も出来んように思いますけどねえ」

芸人という仕事に迷いの無かった彼の言葉は、仕事に追われてストレスの増えてきた僕に「自分の仕事」というものの本質を考えさせる事となった。

再びステージへ

順調に苦しいリハビリもこなし、渚くんは車いすから松葉杖へとかなり動けるようになってきた。この頃になると、病室へはリハビリの時間しか居着かないで、ほとんどの時間を喫煙室のある屋上で過ごしていたと佐野くんは言う。まるで不良学生のように微笑ましくある。

「松葉杖って、なんか舞台だと痛々しいですよね」

渚くんがそう言っていたのを思い出して、僕は彼に松葉杖を贈ろうと計画した。知り合いに義手、義足、松葉杖等を製作している会社の社長さんが居たからだ。その会社で見た金属製の黒い松葉杖は、病院でよく見る木製の物と比較すると格好良くて、シンプルな形状であまり目立たない。渚くんの身長を伝え、松葉杖が仕上がると、僕は東邦大学付属大橋病院に持参した。

「ああ、格好エエですねえ。これやったらいいわ」

と、渚くんも喜んでくれた。

退院後の渚くんの舞台を観たのは中目黒のウッドイシアターで行われた『鼻ギター』の公演だったと記憶している。河野靖さん、ピテカンパニーで佐野くんの相手だった西田征史さんと渚くんが結成していた「ユニット」だ。渚くんから公演に招待された僕は、道に迷いながらも会場に着いた。小さな会場だったので、僕が付いた頃には人が溢れて大変な状況だった。渚くんはあらかじめ録音

された音声との掛け合いのコントを数本披露した。

ランドセルを使うコントがあった。渚くんは例の黄色い帽子を被っていた。本当によく似合う。富田さんや篠崎さんが「チャーミング」と形容するのも頷ける。

生で観る渚くんは、やはりステージがよく似合っている。客前での活き活きとした彼の姿が本当の「村田渚」なのだろう。客席からは大きな笑いが起こる。

後日、渚くんとお笑いについて話す機会があった。

「やっぱり『笑い』に拘こだまりたいんですね」

「それは好きだから？」

「まあ、好きなのが一番大きいんですけど、『笑い』って実は大変な作業なんですよ」

「大変な作業？」

「知らない人を笑わすって難しいですよ。ほら、こういう風に知り合い同士ならたわいない事で笑え

ますよね」

「うん」

「でも知らない人の大きな集団を笑わすのは難しい。泣かすのと違って」

「泣かす方が大変なように思うけどなあ」

「いや、笑わす方が難しいですよ。泣き所って意外とみんな似ているんですよ。だから『一杯のかけ

そば』みたいなのが流行るし、外国の映画でも泣けるでしょ」

「そう言えばそうだね」

「でも、外国のコメディ映画とか、評判倒れになるものもあるでしょ。笑い所って国によっても違うし、もっと言えば一人ひとり笑い所も違う」

「なるほど」

「だから、芸人だからといって『面白い事して』って単純に言われても困る」

「一発ギャグでもあれば、それやってればいいけどね」

「一発ギャグ的なものはすぐ飽きられますからね。それより、こういうお客さんで、こうして、こうしたから笑いが起こった、という感じで自分の考えていたことが、ピシッと嵌ったときが一番気持ちいいですわ」

「数学的だね」

「いや、もっと複雑ですよ。数学なら答えは一つでしょう。笑いには答えは何百、何千パターンあって、決してそのどれもが不正解ではない。でも完全な正解でもない」

「正解ってないの？」

「一番大きな笑いを取るっていうのが正解だとして、客層によっても答えは変わるかも知れませんが、でも、そういう手法というか、技術というかを磨いていくのには凄いい興味があって、面白さ

やはり甲斐を感じるんですよ」

「お笑い」というジャンルは、映画や音楽に対してエンタテインメントとして一つ格下に見られることが多い。映画俳優や音楽家より芸人は「汚れ役」として見られることもある。恥ずかしながら、僕も世間一般のそんな風潮に流されるような部分もあった。だが、理路整然と「お笑い」のメカニズムを語る渚くんを見て、僕は自分の浅慮を反省した。

この頃から、僕は渚くんにエンタテインメントの業界での事に対して、彼の意見を聞くようになってきた。全ての物事には「原因」がある。そして彼は、よりそれを突き詰めて考えようとしていた。

「色々考えるようになって、初めて『この人はここが凄い』というのが分かるんですよ。若い頃はただ単純に凄いなあという感じやったんですけど、自分でもこれに対しては幾つかのバターの突っ込み方があるなあと分かると、面白い人っていうのは必ず一番ベターなバターを使ってるんです。一瞬の間に何十個も候補が挙がって、その中から選んでる筈です。訓練ですよ、常にそう考える、そうすると自然と出来るようになる」

こんな彼の言葉を、お笑いを志す若者には知って貰いたいと思う。

『鮎の喜一』での夜

恵比寿に『鮎の喜一』というお寿司屋さんがある。僕の事務所があった恵比寿参番館の道路を挟んで真正面にある店だ。恵比寿には寿司の名店が多い。僕も恵比寿で十件以上廻った。中には芸能人用のカウンターと一般客用のカウンターを分けている店もある。それでも僕は今でもこの『鮎の喜一』が好きだ。後に、この僕のチョイスは間違っていない事を知る。実はこの『鮎の喜一』は先日亡くなったルチャアーノ・パバロッティなど三大テノールがお忍びで来店した隠れた名店だったのだ。三大テノールの面々は銀座の某高給寿司店より『鮎の喜一』を気に入り、何度か訪れたという。喜一の大将の遠藤哲男さんは相手が有名人だろうが芸能人だろうがあまり意に介さない人で、どのお客にも旨い寿司を握ってくれる。因みに喜一とは遠藤さんの亡父の名である。一度アントニオ猪木さんと一緒にこの店を訪れたこともある。猪木さんが来れば店の人もお客さんも大騒ぎになる光景を何度も目撃している僕だが、この時も大将は気負うでもなく、いつものように「良い仕事」をしてくれた。

まだ、そんな大将の性格を知らなかった頃、渚くんと二人で喜一で飲んだ。僕は渚くんが「顔指し」されたら嫌だと思い、奥座敷を予約していた。結局僕の杞憂だったのだが。

二人とも酒は嫌いな方じゃない。と言うか、大好きと言った方が正しい。旨い寿司に舌鼓を打ち

ながら、どんどん杯は進む。しばらくして渚くんが廁へ立った。廁から戻ってくる渚くんは、

「おお、渚、久しぶり」

という声が掛かった。

「あっ、今田さん」

カウンター席にいたのは今田耕司さんだった。それでも几帳面な渚くんは僕に、

「今田さんがカウンターに居られて、ちょっと飲もうとおっしゃってるんで、行ってきていいですか？」

と気を遣ってくれた。勿論二つ返事で、

「僕は気にしないでいいから」

と返した。

僕は一人でカウンターから漏れてくる声をツマミに飲んでいた。

「渚、吉本に来いよ！」

今田さんがしきりに渚くんにそう勧めているのが聞こえた。

渚くんはフジテレビの『今田耕司のシブヤ系うらりんご』という番組に出演していた。久しぶりの再会だったという。積もる話もあっただろう。渚くんから今田さんの凄さを事細かに解説して貰った事がある。たけしさん、タモリさん、さんまさんといったお笑いのビッグスリーの横に立ち続ける

という「ナンバーツウの凄味」を僕も意識するようになってきた矢先の偶然の邂逅だった。三十分ほどして渚くんはこちらの席に戻ってきた。わざわざ今田さんは、

「長話になってすみません」

とこちらに声を掛けてくれた。

渚くんと今田さんが二人で何を話していたのか、細かい部分までは分からない。だが、一人で聞き耳を立てていた僕には、今田さんが渚くんの現状を良くないと思い、コンビを組むように勧めていること、そして彼の才能をもの凄く買っていること、彼を励ましていることなどが理解出来た。変な話だが、僕まで嬉しくなった。

「渚、お先な」

今田さんは渚くんにそう声を掛け、喜一を後にした。

今田さんが帰った後、

「ビックリしたね」

と、渚くんは声を掛けると、

「いやいや、僕の方がビックリしましたわ」

と返された。その通りだ。たまたま僕が渚くんをこの店に誘ったのだから。今田さんがたまに来る店とは知らなかった。

何杯か飲んで落ち着いた後、大将に、

「お愛想お願いします」

と声を掛けた。すると大将がそつとこちらの席にやって来て、

「今田さんからお代を全て頂いています」

と告げた。

「うわ、やられた。格好ええなあ」

と渚くんは叫び、

「甘井さん、どうしよう。申し訳ないなあ」

と言ってきた。

「いや、今度申し訳ないのは僕の方だよ、だって渚くんはともかく、僕なんか面識もないのにご馳走になってしまった」

と、僕がさっきの言葉を返す番になってしまった。

「それにしても格好良いねえ、今田さん」

「本当、そうですわ」

と、渚くん。

喜一は値段がむやみに高いだけの店ではないが、それでも良い店だ。僕も懐が暖かいときだけし

か来れない。僕までご馳走になってしまって、渚くんにご馳走するつもりが、彼のお相伴に与ったようで、本当に恐縮してしまった。

大将に今田さんは日本酒を飲まれると聞いて、後日、新潟の知り合いから厳選した日本酒を一本送って貰い、今田さんへのお礼です、と喜一の大將に言付けておいた。再び喜一に行ったときに大将から、

「今田さん、美味しい、と言われて飲んでくれましたよ。流石に一升は飲めないから残りは皆さんで、と言付かっています」

と聞いた。この対応も、格好良いなあ、と感じた。

あまり僕に対してはそんな素振りを見せなかった渚くんだったが、この日のことはよほど嬉しかったのだろう、電話でお母さんにも話したそうさ。

渚くんの才能を、同じ業界で実力のある先輩がもの凄く評価してくれた。それを漏れ聞いていた僕まで嬉しくなったのだから、渚くんも思い出に残る夜となった筈だ。そして、元氣付けられたに違いない。

お母さんは息子を励まし、ご馳走してくれた今田さんに、

「ありがとうございます」

と、東京の方へ向かって両手を合わせたそうさ。

燃える闘魂と邂逅

渚くんとの遊びは、どうしても最初の頃は「麻雀」、仲良くなってからは「お酒」となってしまう。あれほど熱病のように打っていた麻雀も、雑誌『わあでい』の副編集長となってからは、忙しくなって出来なくなつた。資料も増え、コピー機もリースし、自動卓を置いておくスペースも無くなり、泣く泣く廃品回収へと出した。もともと渚くんや佐野くんとはたまに外の雀荘などで打つ機会はあったが、他のメンツとは疎遠となつた。オマケにこの時期、僕は結婚に失敗している。結婚を前提に目黒にマンションを借りた僕は、相手の両親への挨拶も済ませ、彼女が東京に慣れてから入籍する予定だった。

「結婚するのだから、夜はきちんと戻ってきて欲しい」

こんな小さな彼女の願いも、僕は守ることが出来なかった。

最初の頃は何とか毎日七時に帰宅しようと思っていた僕だが、編集部でのトラブル、芸能プロダクション関係者との深夜の打ち合わせ、どうしても外せない接待などが重なり、生活は破綻をきたした。悪いのは僕である。

そんな事もあって、その後、僕の酒量は益々増えた。ほとんど毎日のように『わあでい』の編集部があった六本木界限で飲んでいた。



渚くんとの思い出の店『鮎の喜一』

わあでの仕事をメインに、他の仕事をこなしていたこの頃は、収入も良かった。だから毎日飲み歩けたのだが、ストレスも多く、悪い酒だったように思う。渚くん絡んだりすることもあったのだろう、

「この前は、酔っ払ってましたねえ」

とだけ渚くんは言う。

それで、ああ変なことしてしまつたかな、と反省する事数回。

逆に渚くん絡まれる時もあった。お互い、そんな事があつたから、許せるし、また飲もうという気分になつたと思う。言い訳になるが、体質的に飲めない人は別として、素面でずっと大丈夫な程、僕も渚くんも強い人間ではなかつた。渚くんがくだを巻いているときは僕は聞き役となだめ役に徹した。多分渚くんも、僕がそんな状態だつたときはそうしてくれたのだろう。彼は本当に優しい人だつたから。

追い打ちを掛けるように『わあでい』が休刊することが決定した。最盛期には十六万部まで行つた売り上げも数万部に落ちていた。個人売買や出会い系の主流は雑誌ではなくインターネットに移つていた。

僕にとつては良い機会だつた。生活や仕事を見直す時期となつた。納得してやらないと良い仕事も出来ない、という彼の言葉や生き方が頭にあつた。

僕は『グローバルヴィジョン』という福祉系経済誌のスタッフに加わつた。発行部数は少ないが、硬派な雑誌で、自分の意見も誌面に反映させることが出来るのが魅力だつた。

思えば、これまでの仕事は僕じゃなくても誰かがやつただろうし、無理矢理に自分を納得させストレスを溜めることもあつた。

渚くんと「お笑い」の関係は天職だ。だから仕事の不満ばかり愚痴る僕を見て

「嫌だつたら辞めた方がええんとちやいます」

というアドバイスになつたのだろう。芸人でない彼の姿は想像できない。

彼ほどではないが、僕も手応えのある仕事の大切さを痛感し始めた。その分、以前よりも忙しさの密度が変わつて、毎日のように飲み歩くことは出来なくなつた。収入も減つたが、やり甲斐がその部分を支えてくれるように感じた。

僕は渚くんの困窮した時期も知っている。でも彼は自分の目指すべき目標に向かっていつも真っ直ぐだつた。

「イレギュラーな笑いを取つても意味がないんですよ。それは笑わしているじゃなくて笑われているんだから」

と話してくれたことがあつた。どんな状況でも、彼は自分の「芸」の事を考えていた。

渚くんと久しぶりに六本木で飲んでるとき、僕は渚くんに耳打ちした。

「この店、よくアントニオ猪木さんが来るんだよ」

「ホンマですか！ わあ、今日来たらエエなあ」

と渚くん。入院中の読書以来、格闘技を好きになっていった渚くんは目を輝かせた。

渚くんも含め、何人かで一時ほろど飲んでいただろうか、不意に扉が開いて本当に猪木さんがやって来た。猪木さんは笑顔で店内を見渡し、

「どうも、どうも」

と周りに声を掛けていつもの奥の席に座った。

「うわ！ 本物や」

多分入院して格闘技好きになっていなければ、渚くんもそれ程の興味は示さなかったのだろうが、僕の差し入れた格闘技関係の本ですっかり猪木さんのスケールの大きなエピソードの虜となっていた彼は、案の定、食い付いてきた。

「猪木さんの話、聞きたいなあ」

渚くんがそう言ったので、僕は酔いも手伝って図々しくも彼と一緒に猪木さんの隣に座った。

「おお、どうしたあまちゃん」

長い間猪木さんをCMキャラクターに起用している企業のデザインを手掛けていたこともあって、猪木さんはこんな僕にも暖かく接してくれる。格闘技ファンなら「猪木のリズムタッチ」と言えば

ピンとくるだろう。この会社の社長には僕は本当に可愛がって貰っていた。

「仕事は順調かい？」

そんな事まで気に掛けてくれる猪木さん。話題になれば何でも良いというスポーツマスコミ等の悪しき風潮でスキャンダルばかり書き立てられ、誤解されている部分も大きい猪木さんだが、本質は生粋のスポーツマンだ。一度深夜にホテルの部屋を訪れたときには、自室でトレーニング中で汗だくで出てこられたことがある。引退した今でも自分で決めたトレーニングをキッチリと行っている。僕は、

「これこそが「プロ」の格闘家だよ」

と、よくチャクリキの若い選手に話して聞かせる。一流のプロになりたければ、24時間格闘家でなければならぬ。

「芸人の村田渚くんです」

と猪木さんに渚くんを紹介して一緒に飲んだ。猪木さんからは嘘のようなスケールの大きな話が次々と出てくる。渚くんもこの時ばかりは聞き役に廻っていた。

酔っ払った勢いに任せて、猪木さんにくだらな話をする僕を、

「おっさん！ 五月蠅い！」

と、渚くんは一喝した。

「今、猪木さんがもの凄くいいお話をされているでしょ。もっと聞きなさい」

と、僕は渚くんにダメ出しをされてしまった。

猪木さんの話は更に続き、渚くんは真剣に頷いていた。

ふと我に返ると、猪木さんと渚くんの顔合わせに不思議なものを感じた。どちらも僕の大好きな人物で、人前で光る人たち。酔っ払って馬鹿話している僕とは違って、渚くんにとって、この日の猪木さんとの邂逅は得るものが多かった筈だ。

後になって、鼻エンジンのネタでアントニオ猪木を取り上げたものがあることを知った。松丘くんが、

「猪木ボンバイエ」

という猪木さんの入場曲でお馴染みのフレーズを、

「猪木 in シアター D」

などとボケて言う。

「なんぼなんでも猪木さんがシアター D では演らんやろ」

と突っ込む渚くん。猪木さんの大きなスケールがあるから、ビデオで見ても面白かった。

猪木さんから色々な話を聞いたこの夜のことが、渚くんのネタづくり役に役立ったのだとしたら、僕にとっても嬉しい事だ。

鼻エンジン始動

しばらくの間、なかなか渚くんと会ったり飲んだりする機会がなかった。それは渚くんに大きな転機が訪れていた為だ。坂道コロコロで人気を博していた芸人の松丘慎吾くんとコンビを結成して、いよいよ『鼻エンジン』が始動したのだ。

後で知ったのだが、松丘くんを誘ったのは渚くんからだったそうだ。

「これでアカンかったら芸人辞めるつもりでやるから」

と渚くんは松丘くんに言ったという。

芸人である村田渚しか知らない僕にとって、芸人を辞めた渚くんの姿は想像も付かないが、彼独特の言い回しで、それ程このコンビに賭けていたということだろう。

鼻エンジンの話はカメラマンの河村さんから聞いた。

「もの凄く面白いですよ。二人ともベテランなのに、なんか、ちょっと照れていて、新人のような新鮮味もあって、今、一番注目しています」

最大級の讃辞を鼻エンジンに贈っていた。

鼻エンジンを結成して、渚くんはソニー・ミュージックアーティスツが新しく立ち上げたお笑い部門の「NETプロジェクト」に移籍する。SMA（ソニー・ミュージックアーティスツ）のNEE

Tプロジェクトのプロデューサーである平井精一さんは長年お笑いの業界で活躍されてきた方で、渚くんはようやく長いトンネルから抜け出し、その才能を充分に発揮できる相方と事務所を得たのだ。鼻エンジンは結成から僅か半年でお笑いの最高峰である「M-1グランプリ」の準決勝にまで進出した。まだそんなにネタの数も無いであろうに、流石の実力である。吉本興業の専属カメラマンとしてM-1を撮り続けていた河村さんは、二〇〇五年度のマイフェバリットは鼻エンジン、だと僕に話してくれた。リストバンドを弄り続ける松丘くんの面白さ、それを充分に引っ張って、ここぞというタイミングで突っ込む渚くんとの絶妙さ、他の出演者には決して出せないベテランの凄味を存分に発揮していたと河村さんは僕に教えてくれた。

今となってはもの凄く後悔しているのだが、僕は鼻エンジンの舞台を生で観たことが無いのだ。渚くんの死後、SMAの平井さんのご厚意で、鼻エンジンの過去のライブ映像をお借りすることが出来、何度も、何度も繰り返し見た。悲しくて仕方のないような状況なのに、ビデオの中の渚くんは、そんな僕すら笑わせてしまう。鼻エンジンは河村さんの言う通りに掛け値なしに面白かった。

言い方は色々あるけれど、衝撃的だったフォークダンスDE成子坂と比べても、

「ふたつとも良い」

の言葉しか出てこない。勿論、コントと漫才の違いもある。でもそれ以上に、年齢を重ねたからこそ出来る間口の広さを、鼻エンジンには感じた。音楽の例えばかりになって恐縮だが、エリック・

クラプトンに例えるならばフォークダンスDE成子坂は「クリーム」の時代に当たり、鼻エンジンはソロ、それも「アンプラグド」などを演りだした時代に当たると言えばお解り頂けるだろうか。衝撃的なデビュー、そして年輪を重ねた者だけが出せる深み。渚くんが追い求め続けた「芸」は一つの答えを出しつつあったのだ。

僕はフォークダンスDE成子坂の突き放したような、疾走感のある反射的なお笑いも好きだ。そして鼻エンジンのハズレのない安定性も好きだ。これは僕が渚くんと、いや、フォークダンスDE成子坂や鼻エンジンとギリギリ同じ時代を生きてきたから感じられた事だろう。だからこそ、鼻エンジンの舞台を見逃したことに僕は切齒扼腕する。

SMAに入ってから、渚くんは後輩たちも可愛いようだった。平井さんによれば渚くんはNETEプロジェクトの精神的支柱だったそうだ。渚くんが後輩の話をするのは珍しい。今までは先輩芸人の凄いとここの分析に余念のなかった彼だ。ところがSMAでは一番のベテランとなり、事実上のトップなのである。そういう意味で、渚くんが下の子たちに向ける視線も変わってきたように思う。何より相方や事務所など環境が良かったからだろう。渚くんがSMAの話をする時には、後輩達の話をよくしていた。小梅太夫などはテレビで見かけるようになる前から渚くんの口からその名を聞いた。

「若いけど、頑張っている奴が一杯居るんですよ。そいつらの頑張りに負けんようにせんとね」

そう言いながらも、渚くんは嬉しそうだった。ホリプロに入る前に、高校生で何度も東京にネタ見せに通った自分の姿を彼らに重ね合わせていたのかも知れない。渚くんは数年前とは違い、穏やかな表情をするようになったと僕は感じた。

後輩と飲みに行くことも増えたようだ。そして、後輩たちに色々と「お笑い」について教えていたという。HEY！たくちゃんの藤谷くんは、そんなSMAの後輩たちに激しく嫉妬したという。

「僕は羨ましいと同時にジェラシーを感じました。僕ほど渚くんを好きで芸人になった者は居ないと自負しているのに、僕には渚さんと飲んで、『お笑い』の話をして貰った経験がない。当時の僕はペーペーだったから仕方ないかも知れませんが、それでも羨ましいですよ」

これ程まで言われる位だから、SMAの後輩芸人たちには、渚くんは一緒に飲むことで、掛け替えのない宝物を遺していったかと思う。そして後輩芸人たちのブログなどを読むと、彼らがどれほど渚くんを慕い、目標としていたのか伝わってくる。SMAは渚くんにとって長い間探し続けた「安住の地」となる筈だったのだ。

結成後、僅か半年でM-1準決勝に進出した実力派・鼻エンジン。二〇〇六年度には決勝進出が有力視されていた。

お笑い論と楽しみにしていた仕事

久しぶりに渚くんから連絡があった。便りがないのは良い知らせではないが、後で知ったこの期間の渚くんを取り巻く状況の変化ぶりなら、本当に忙しく、なかなか飲んだり出来なかったことも理解出来る。

「色々とゆっくり話したいんで、甘井さんのところに行きますわ」

そう言って、渚くんは引越したばかりの南麻布の借家にやって来た。

この年の二月に、僕の父が他界した。独りになる母が心配で、麻雀ばかりやっていた恵比寿参番館が翌年に解体となる予定だったので、僕は南麻布に古い一戸建てを借りて愛媛の母を呼んで同居を始めていた。蛇足ながら、家の方が手狭なのと、趣味である庭での草木いじりが出来ないために、約一年後、僕の母は愛媛に帰郷するが、連れ合いを亡くしての一年を東京にて過ごし、環境が変わった事は母にとっても意味があったかと思っている。

「一軒家ってエエですねえ」

あばら屋ではあるが、僕も気に入っている古き良き雰囲気漂う新事務所兼自宅に、春の日も暮れた頃、渚くんはやって来た。

久しぶりだったので、お互いに近況報告をした。渚くんは鼻エンジンを結成したこと、SMAの

所屬となったことなどを話し、僕は仕事を『わあでい』から『グローバルヴィジョン』にシフトしたことなどを話した。渚くんは僕の作っているグローバルヴィジョンを手にとり、

「あまり見たことないけど、ちゃんと読んだら面白い雑誌ですねえ」と褒めてくれた。

階上の母はとつくと夢の中で、僕は渚くんとの話を続けた。この日は渚くんと一滴も酒を飲まずに長時間話した。思えばこんな事は渚くんが入院していた頃、病院の屋上で話した時以来だった。

「僕は渚くんのように第一希望で仕事をしている人を尊敬するよ」

「第一希望？」

「うん、僕は本当はバンドで飯が食いたかった。若い頃はそう考えていたんだ。でもバンドの方は上手く行かなくて、今はデザインや編集で生活してる」

「でも、ちゃんと生活出来るって事は、その仕事が甘井さんに合つたとたんちゃいます？ それはそれで良かったと思いますよ」

「そうだね、今の仕事に出会えたことには、本当、感謝しているんだ。でも若い頃の夢は夢で、やっぱりずっと想い続ける……」

「僕にはちょっとわからん事ですね」

「そりゃ、渚くんはずっと芸人だったし、今でも芸人以外でやりたい仕事なんてないでしょ？」

「ええ、まあバイトはしていますけどね」

「本業に対する想いがしっかりしているから、あくまで「アルバイト」なんだと思うよ。僕はバンドをやりながらデザイン事務所でバイトをしていた。その内にバンドが上手く行かなくなつて、自分で想っていた自分の「本業」と「アルバイト」が逆転してしまった。だけど渚くんならそんな事ないと思うんだ」

「ハハハハハ。そりゃ僕にはないでしょうけど」

「大変な生き方だと思うよ」

「そうですね。大変ですね」

僕は同級生のテノール歌手、秋川雅史さんの話をした。紅白歌合戦に彼が出演してブレイクする10カ月前の事だ。

「僕と同級生でテノール歌手の秋川って居るんだけど」

「へへえ、色んな知り合いが居ますね」

「うん、彼は小学生の頃から『俺はクラシック歌手になる』と周りに公言して、その通りにクラシック歌手になった」

「そりゃ凄いなあ」

「だけど、やっぱり色々苦労していたよ。アルバイトをしながら大学院を出て、イタリアに留学して、

プロとなってデビューした後でも、専門学校などで教壇に立って、生徒を教えたりしながら、それでも歌手として一流を目指し頑張っている」

「凄いですねえ」

「いや、同じだよ。渚くんも凄い」

「そんなん言われたら、照れますわ」

「第一希望で夢を諦めず頑張っている人には、必ずいつか日が差すと思うんだ。少なくとも僕は自分が駄目だった分だけそう願っている。だから渚くんも、秋川も、絶対に売れると信じているよ」

「本当、頑張りますわ」

渚くんは笑顔でそう返してくれた。

丁度、何冊か机の上にあったグローバルヴィジョンの中に、秋川雅史さんが表紙のものもあった。

「僕も表紙にしてくださいよ」

と、渚くん。

「あんまり部数も多くない経済誌だけど、いいの？」

「そんな関係ないですよ。あー、うん、今年はM-1を獲りますから、そのタイミングで表紙にしてくださいよ」

あまり大きな事を言わない彼だったが、この時は、ハッキリと「獲ります」と言った。それ程、松

丘慎吾くんとのコンビ、鼻エンジンに自信があったのだろう。

「河村さんから聞いたよ。去年は準決勝だったんだよね」

「去年はホンマ組んでから時間がなかったんですけど、今年は準備万端にしてやろうと思ってます」

「もの凄い面白って、河村さん褒めてたよ」

「まだまだですわ。まだまだ面白くなりますからね」

そう言う渚くんの目は輝いていた。

眠っている母を起こさないように、静かに二階の台所へ行って、僕は何度目かのお茶を用意した。冷蔵庫にはビールやワインがあったのだが、何故かこの日の会話は、互いの人生や仕事といったシリアスなものばかりとなり、酒を飲んで酔いに任せて喋ることが勿体ないような気がしたのだ。

再び机を挟んで渚くんと向かい合う。

「あ、そうそう、僕は芸能プロダクションのルージュの役員になったんだよ。あの『パイレーツ』が居たところ」

「へーえ、パイレーツ姉さんですか、懐かしいなあ」

そう言って笑う渚くん。

「うん、社長が古くからの友人だね。何も出来ない役員だけど」

そう言いながら、僕はちよっとした自分のアイデアを渚くんに聞いて貰った。

「今の事務所はアイドルのDVDなんかを制作しているんだけど、同じアイドルで何度も撮っている内容がマンネリになってくるんだよね」

「そりゃそうでしょう」

「それこそ予算が豊潤にあつて、ロスだハワイだバリだと色んな場所で撮れば変化も出るだろうけど、大体沖縄やその周辺が多いから、どうしても似たり寄つたりの内容になってしまう。だから、ちよつとしたストーリーやコントを入れて、面白いものに出れないかと思って……」

「でも基本的にはそんなことやつた事のないアイドルが演じるんですよ。難しいですよ」

「例えば学園物にして、五〜六人のアイドルが通う学校という設定にする。そこで一〜二分のショートコントやストーリーを沢山DVDに収録したら面白いと思うんだよね」

「学園物ねえ」

「うん、ドリフとかでやってたようなの」

「うわ〜甘井さん、古いなあ」

「だから、僕なんかを考えちゃ面白くならない気がするんだよね」

そう言いながらも、僕は渚くんがそんな話を聞いてくれるのを嬉しく思っていた。以前に、わあでいで連載を持って、とお願ひしたときには「演者」にこだわりたいからと、断られていたことを思い出した。あの頃の頑なだった渚くんとは違って、今の渚くんは、本当に良い意味で「自然体」だった。

た。

「もし、渚くんがこんな仕事を任されたら、どうする？」

「う〜ん。アドリブには期待できないですから、最初から登場する女の子のキャラクターをしつかり作りますよね。必ず方言を使う子をひとり入れとくとか」

「ああ、関西弁とか？」

「いや、関西弁なんか、もう手垢付きまくりで目新しくも何ともないですよ。それやったら広島弁の女の子の方がエエんちゃいますか」

知らず知らず、こちらの話に乗ってきてくれた渚くん。

「どんなストーリーが良いだろうねえ」

「十六、十七歳の若い女の子でしょ。台詞とかも長いのは難しいと思いますよね。少ない台詞でシチュエーションとかで笑わすみたいなき感じですかねえ。何か、ちよつと不条理なやつでもイイかも知れませんかよねえ。何か解らんけど面白いみたいな感じで。結構、先生役の人に実力が要求されるかもなあ」

きちんと返してくれる渚くんが嬉しかった。僕は思い切つて、

「ねえ、もしこの企画を上手く通せたら、渚くん、その台本を書いてくれない？」

と、お願ひした。

「あ、乗せられてたんですか？」
といって笑う渚くん。

「そうですね。ただ僕が書くちゅうんじゃなくて、もしやるんなら一緒に考えましようや。書類作ったりするのは甘井さんの方が得意やるから。でも、僕はSMAの人間なので、一応事務所に聞いてみますね」

彼からその言葉が聞けただけで、僕はもの凄く嬉しかった。

「作品」を作ることぐらい僕にとって興奮することはない。普段の仕事でも、工業デザインの範疇になるが、何度が「製品」のデザインを手掛けたときは嬉しかったし、その商品を無条件に愛しいと思った。雑誌やカタログなど、アイデアが形となった仕上がりが良い出来たと思えるときは、いつも嬉しかった。フォークダンスDE成子坂の解散に際して、マネージャーの門間さんは、彼らの「作品」を何としても後世に遺しておきたい想いから『自縛』を企画したという。それは村田渚、桶田敬太郎、二人の想いでもあっただろう。僕は滑り込みのような形でこの『自縛』に僅かながらも関わることが出来た。『自縛』は今見返しても、作品としての形を高いレベルで保っている。特に面白いを志す若い人たちには是非見て欲しい作品だ。そんな凄い作品を作り上げた渚くんと、彼の得意とするフィールドで、一緒にモノ作りをすることが出来たなら、僕にとってこれ以上の喜びはなかった。きっとSMAに移籍し、相方にも事務所にも恵まれたこの時期だからこそ、渚くんは乗っ

れたのだと思う。

そんな話を切っ掛けに、「お笑い」についての揺るぎなき経験と自信を持つ渚くんは色々な話をしてくれた。ホリプロ時代の地方営業のこと、今田耕司さんが何故凄いのかということ、そして島田紳助さんの話。

「紳助さんは天才ですよ」

「うん、凄いやと思うけど」

「でもね、甘井さんは何で凄いか、ホンマのそこは解ってはらへんと思いますよ」

「え、どういう意味？」

「例えばゲストのタレントが何か言うて、それに対して紳助さんがツッコむ時、絶対に紳助さんの頭の中では百近いパターンが一瞬で出て来てると思いますよ」

「え、そんなに」

「ツッコミってのは、慣れと訓練ですよ。努力が天才を作るんです」

「へえ、そんなもんなんだ」

「紳助さんの凄いやところは、そんな百近い切り返しの中から、常に一番の正解をチョイスしていることですよ。パターンを増やすだけなら練習すれば出来ますけど、その中で常に正解を選び続けるなんて、よっぽどの場を読む能力やセンスがないと出来ませんよ。まあ、そんなセンスも場を重ねる

ことで磨かれて行くんですけど」

「うわ、僕は今までバラエティをそんな感じで観た事はなかったなあ」

「いやいや、それが当たり前ですよ。僕みたいな人は少数派やと思いますよ。でも売れて、なおかつ保つ人というのは、絶対にそんな事が出来ている」

「お笑いって奥が深いんだねえ」

「うくん、そうですねえ。そやから僕も何時まで経ってもこの仕事に夢中で居られるんでしょうねえ」

「文学や映画みたいな、一つの文化だよ」

「そんな堅苦しいもんじゃなくて、ホンマ庶民文化だと思いますけど、笑うことで一瞬に幸せになれるでしょ。最高の庶民文化ですよ」

「笑いって深いね」

「そう！ そう！ ホンマ深いんですよ。『世界の中心で愛を叫ぶ』みたいな映画でみんな泣くでしょ？ 泣き所って共通点が多いんですよ、意外と。それに比べて笑い所っていうのは、百人居たら百通りあるんです。その中でも一番大きなパイに向かつて行かないと大きな笑いは取れない」

泣かすより笑わす方が難しいという渚くんのこの持論は前から何度か聞いていた。けども、この頃から渚くんは自分自身の方向性を、「一番大きなパイ」に向かうべきだと考えていたようだった。鼻エンジンの芸風がフォークダンスDE成子坂と一線を画していたのには、渚くんのこんな考えが根

底にあったからなのかも知れない。

渚くんは次々と自分の「お笑い」に対する想いを語ってくれた。僕は何枚も何枚も目から鱗が落ちてゆくを感じていた。エンタテインメントの世界で歴史的にずっとその一翼を担っている「お笑い」。だが、それは浅学な者の蔑視の対象になることもあった。恥ずかしながら、渚くんと会うまでは僕もその一人であった。一つの笑いを取るために、演者はどんなに頭を使い、訓練をし、努力を重ねているのか、僕はそれを渚くんから学んでいった。この日も僕は、随所で自分の浅学を恥じた。

渚くんの話は一晩中続いた。不思議と時間が経てば経つほど、お互いに目が冴えてきたような感覚だった。色々な話をしたついでに、僕はフォークダンスDE成子坂が素晴らしかったことを思い出しながら渚くんに話した。それについては渚くんも、

「あれは、僕にとって本当に完成型に近かったんです。でも、今度は鼻エンジンで、あれとは全く違ったアプローチであれを超えなければ」

と述懐しながら、それでも意識は常に前を向いていた。

気が付けは外はすっかり明るくなっていた。

「遅くまで、ちゅうか、朝までありがとうございました」

そう言って帰って行く間際に渚くんは、

「そうそう、佐野さんに可愛い彼女が出来たんですよ。僕もこの前遊びに行つて鍋をご馳走して貰いました。本当に良い娘なんですよ」

「へえ、知らなかった」

「せやから甘井さんも前みたいに夜中の二時三時に佐野さんに電話して、『今から飲もうや』なんて付き合わせたら可哀想ですよ。その代わりに僕が付き合いますから」

と言つて笑つた。一番近くにいる後輩の佐野くんの事をいつも渚くんは気に掛けていた。

その後、僕は渚くんと二人で飲むことが多くなつた。

渚くんは生来の茶目つ気があつて、酔つ払うとそれが顔を出してくる。ある時朝まで飲んで二人ともへろへろになつていてというのに昼まで営業している水商売の人が仕事帰りに飲むような店でまた飲んで、酔つ払つた渚くんが周りに、

「お前ら、この人を誰や思うてんねん」

とちよつかいを出した事があつた。

勿論、渚くん流のジョークだが、顔知られている渚くんが、わざわざ素人の僕を「この人」なんて言うのが面白かつた。誰かが、

「いやいや、誰やねん」

と返してくれば話も繋がつただろうか。

渚くんは常に誰かを笑わそう、笑わそうとしていた。

六本木でノブ ハヤシ選手を含むドージョーチャクリキのメンバーと飲んでいるときにも渚くんは来てくれた。あんまり上下関係でかしまつてしまうと人を笑わせることなんて出来ない。でも格闘技の世界は人一倍礼儀に厳しい。僕は理事の一人であつたが、その場にはノブ選手を筆頭に空手八段の本部長、そして会長も居た。最初に渚くんは僕に、

「どういふ偉さの順番になつてゐるんですか？」

と、こつそり聞いてきた。

僕が説明すると、渚くんは最低限の線は崩さずに、ギリギリの所で話を続け、時には鋭いツッコミも披露し、笑いを取つた。

「結構、無茶苦茶言いよるなあ、と思たけど、先に笑ろうてしもたよ。彼は面白いなあ」

本部長や会長は口を揃えた。

あまり遠慮したしやべりだと面白くないし、あまりやりすぎると怒りを買つてしまふ。絶妙な会話というのは本当に難しい。そんな所にも渚くんの「芸」の一端を見せて貰つた。

渚くんとは寿司屋にもよく行つた。喜一のような良い店には気軽にも行くことは出来なかつたが、大衆店のような寿司屋でも二人でよく飲んだ。僕も渚くんも、田舎から出てきた者としては、東京の魚の種類の豊富さは嬉しかつた。

「美味しいですねえ」

「美味しいよね」

僕と同じで、酒を飲むときはあまり物を食べなかった渚くんだが、寿司屋ではよく食べ、よく飲んだ。

「美味しいもんは一杯食べますよねえ」

そう言って笑っていた渚くん。

「お互い頑張っつて、もっとエエもん食わんとねえ」

僕も無邪気にそう返していた。

最後の三人での夜

渚くんと佐野くんと三人で飲む酒が僕は一番好きだった。渚くんが酔い始めて「本気モード」になったときの会話は、僕なんかでは本当に役者不足だったし、佐野くんはそんな渚くんと軽妙なやり取りをする。それを見ていたり聞いていたりするのが僕は好きだった。本当にどんなお笑い番組よりも笑わせて貰った。プロの芸人が二人喋るのを一人特等席で見ているのだから、今考えると贅沢極まりないことだ。

中目黒の雀荘で朝まで三人麻雀をしたり、飲み会の後など三人でもう一軒行ったり。三人とも酒が好きな方だったのでよく飲んだ。多分二人の方が僕に気を遣ってくれていたのだろうが、三人で飲んだときの記憶は楽しいものばかりだ。渚くんは本当に佐野くんを可愛がっていたし、佐野くんは渚くんを慕っていた。芸人の世界での「兄さん」とはきつとこんな感じなのだろう。二人の関係は傍目からも羨ましかった。

僕が十年住んでいた麻雀の巣窟、恵比寿参番館の横に『アートカフェー107』というカフェーがある。オーナーである鈴木正勝さんはフォークダンスDE成子坂が活躍している頃、ホリプロで常務取締役をされていた方で、次期社長の呼び声も高かった芸能界の大物だ。正勝さんはアンドレ・カンドレと名乗り、鳴かず飛ばずだったシンガーを「井上陽水」と命名し、大々的に売り出したり、

美空ひばりさんの『愛燦々』のプロデューサーを務めたことでも知られている。アートカフェでは井上陽水さんを何度も見かけた。NHK・BSで井上陽水さんがホスト役となって一時代を築いてきた大御所フォークシンガーたちと夢の競演を行うという話題になった番組があったが、それも正勝さんのプロデュースによるものだ。

そんな大物でありながら、正勝さんは僕に気軽に接してくれた。住まいが隣ということもあったが、毎日のように店が閉まった後でも「泣きの一杯」をねだる僕に快く飲ませてくれた。時には朝まで一緒に懐かしい映画を観たこともある。秋川雅史さんが所属する大手芸能プロダクション・Kダッシュの松田英夫社長も正勝さんの古くからのご友人だそうで、一緒に飲ませて貰い、秋川さんの話を色々とした事もあった。一時期六本木ばかりで飲んでいた僕だが、正勝さんと親しくなるとアートカフェで飲むのが日課のようになってきた。

アートカフェには個性的な常連メンバーが揃っていた。僕と歳の近い建築家の神谷さん。カルメシマキ&OZでの名演で僕ですらその名を知っていた超一流ピアニストの深町純さん。亀田金属の二代目の亀ちゃん。そして僕と同じ愛媛県の西条市を故郷に持ち、アメリカに留学し、ゴールドマンサックスを経て一流ファンドマネージャーとして活躍する白石さん。白石さんは歳は僕より遙かに若いのだが、数十、数百億の資金を動かし、数億円の年収を得ている。あのホリエモンを一喝したなんて事もあったそうだ。

そんな常連の人たちとアートカフェで飲んでいるときに携帯電話が鳴った。

「甘井さん、今、佐野と一緒になんですけど、飲みませんか？」

渚くんからだった。喜んで、と返事をして、アートカフェに居るから、と付け加えた。ちょうど僕は白石さんと経済関係の話から脱線し、四方山話をしている頃だった。渚くんは佐野くんがやって来ると、オーナーの正勝さんが渚くんを、

「やあ、元気？」

と声を掛けた。

「はい、今はソニーで頑張ってます」

と返した渚くんは、僕の座っているテーブルに着いて、

「昔ホリプロに居た頃は、鈴木さんは偉かったんで、話した記憶も無いんですわ」

と例の照れたような笑顔で僕に告げた。

白石さんに簡単に二人のことを紹介すると、そこからはもう渚くんは佐野くんの独壇場だった。次々と繰り返されるボケとツッコミに白石さんは目を丸くして驚いていた。僕も本当に笑いつ放しだった。

「芸人さんって、本当に凄いですねえ」

ファンドマネージャーとして活躍し、財界では名が通っている白石さんも、この日ばかりは渚く

ん、佐野くんのマシンガントークにシャツポを脱いだ格好となった。渋谷の109前で人を集めすぎで警察から注意を受けたほどの二人のトークだ。とても常人では太刀打ちできない。その内に隣のテーブルからも笑い声が漏れ聞こえるようになった。僕は二人の才能を改めて誇らしく思い、その成功を心より祈念した。

一段落して、

「何か食べに行こうか？」

と僕から声を掛けた。

「お寿司がエエですねえ」

と、渚くん。

だが集まったのも遅く、しばし飲み、歓談したので時刻は既に深夜の二時を回っていた。こんな時間に開いている寿司屋の心当たりは一つしかなかった。

「あんまり上等な店じゃないけど、行こうか」

アートカフェとは恵比寿駅を挟んで反対側にある寿司屋。そこなら朝の五時まで営業しているのを知っていた。

店に着くと僕は、

「そんなに高い店じゃないから、何でも好きな物を頼んでね」

と酔いに任せて大きな事を言った。

幾つかのネタを頼んで食べた後、

「僕、ウニ貫いますわ」

と言つて、渚くんがウニを注文した。その時、佐野くんに何か目配せをしているようだった。

「このウニっちゅうのは、なんて言うんですかねえ……」

目の前にウニが握られてくると、いつもと違い、突然ウニのウンチクを語り出す渚くん。するとすかさず佐野くんが横から手を伸ばして渚くんのウニを二カンともいつべんに取って、自分の口の中に放り込んだ。

口の中一杯にウニを頬張り、得意気な表情の佐野くん。

僕はどういう流れなのか全然解らず、佐野くんに言った。

「駄目だよ、佐野くん。それは渚くんのウニなんだから。大将、もう一回ウニね」

僕は注文をやり直した。

再び握られてくるウニ。でも、渚くんはまたも手を付けず、

「いや、美味しそうなウニですね。この新鮮さが……」

と語り出す。

案の定、再び横から佐野くんが手を出し、ウニは佐野くんの胃袋へ。

この段になって、やっと僕にもこの二人の悪戯が理解出来た。

「大将、ウニもう一丁」

笑いを押し殺しながら、僕は再び注文する。

渚くんの前に運ばれてくるウニ。そして当然のように横取りする佐野くん。渚くんはわざとらしく、消えていったウニのあつた場所を悲しそうに眺めている。

「駄目だよ、横取りしちゃ」

異変に気付いた大将も、そう言って再びウニを握る。

でもそんな事は全く意にも介さずに、今度はウニが出るやいなや、むんずと掴み口に放り込む佐野くん。

大将はちよつとムツとしていた。僕が、

「ごめんなさいもう一つ」

とお願いと、渋々握ってくれた。

渚くんの前に運ばれるウニ。わざとらしく安堵の表情を見せる渚くん。そして今度は、

「あれ、僕のビールは？」

と横を向いた瞬間に、ウニは二カンとも佐野くんの口の中へ。

ここまで来て、やっとこの悪戯に気付いた大将が笑い出した。

「ハハハハハ。そうかそうか。ならどんどん握るから参ったすんなよ」

この時点で既に十カンものウニを大慌てで食っている佐野くん。しかし、平然とそしらぬ顔を続けている。

宣言通り、どんどんウニを握る大将。そして、

「ああウニや、食いたかった」

と言いつつながら、佐野くんが横取りする「間」を作る渚くん。

そして、お約束事に忠実にウニをむんずと取って頬張る佐野くん。

多分お店の人を笑わそうとしたこの悪戯は、途中から佐野くんイジメのような様相を呈してきた。渚くんがどんなに長く待ちのタイミングでも、腹と胸が一杯になってなかなか次の食えない佐野くん。それでも無理矢理に飲み下してプロ根性を見せる佐野くん。そんな所でプロ根性を見せなくても良いと思うのだが、それが彼の性分なのだから仕方ない。

結局、佐野くんは二十カンほどウニばっかり横取りして食べ続けた。

大将も終いには呆れて笑っていた。

この店が安い店で良かった。まあ、だからこそこんな悪戯を渚くんも思い付いたのだろう。喜ぶような店だったらお会計が恐ろしい事になっていた。

佐野くんはこの日、人生で一番ウニを食べた日となった。途中で見ている僕の方が気持ち悪くなっ

てしまい、しばらくウニが食えなかつた程だ。

店から出て、三人で再び大笑いした。

「ホンマ、よう食つたな、お前」

「渚さんが食わなきゃいけないように持って行ったんじゃないですか！」

そう言い合いながら笑う渚くと佐野くん。

一緒に飲むようになって、随分長い間見てきた私生活でも手の合う二人のコンビ。

この日は特に思い出に残る楽しい夜だった。

これが三人で飲んだ最後の夜になるなんて、誰一人思っていなかった。

武蔵小山での最後の夜

二〇〇六年秋。入稿作業を目前に控え、慌ただしい編集作業に追われていた。

「甘井さん、何してます」

携帯電話から渚くんの声。もう窓の外は夜になっていた。

「ちよっと、忙しくてねえ」

そう返すと、

「いやあ、僕、飲みたいんですよねえ」

少し酔っ払っているような渚くんの声。

「でも、僕、免停になってしまつて、だから武蔵小山で飲みませんか？」

そう言う渚くん。僕は残っている仕事の量を考えて、断ろうと思い、

「ちよっと無理かなあ。ごめん」

と返した。

「ああ、しゃあないですねえ。でも飲みたかつたなあ」

と残念そうな渚くん。本当に残念そうな声だった。

元々僕も酒が好きで仕方のない方だ。急ぎの頁に段取りを付けた後、小一時間後位だろうか、渚

くんに電話した。

「段取りが着いたから、今から武蔵小山に行くよ」

「え！ 大丈夫ですか？」

「うん。僕も飲みたいし。でも僕もそんなに持ち合わせがないから、安いところにしようよ。じゃあパルムの前で」

そう言つて電話を切り、タクシーをつかまえて武蔵小山に向かった。

武蔵小山に着き、長い商店街の入口、パルムの看板の下で待っていると渚くんがやって来た。

「わざわざありがとうございます」

そう言つて人懐っこい笑顔を見せる渚くん。部屋で少し飲んでいたようでホロ酔い加減だ。

さあ、どこに行こうかねえ、と話していると不意に、

「あつ、渚さん！ おはようございます」

と、もう夜中の十二時過ぎなのに大声で挨拶された。

振り返ると数人の男性がこちらを見て頭を下げている。

「おうー」

と返事をする渚くん。その中にロバート・デ・ニーロのモノマネをするテレビで見たことのある芸人さんも居た。

「甘井さん、これが〇〇くん、これが□□くん…」

と三人を渚くんが紹介してくれたのだが、残念ながら名前まではよく憶えていない。

「こちらは甘井さん」

と三人に渚くんが紹介してくれたが、さらにこっちの方が、誰なの？ という感じで解らなかつただろう。

それでも多くの芸人さんたちに渚くんが慕われている様子が窺えた。

「渚さん、これから飲みですか？」

「そうそう。じゃあまた」

と、三人と別れた後、武蔵小山のスナック街を探検してみようということになった。渚くんも居酒屋ではよく飲むが、駅から向かって商店街の左側一角のスナック街にはほとんど行ったことがないようだった。

「なんか、ホンマ探検ですねえ」

そう言つて無邪気に笑う渚くん。

裏通りを行ったり来たりしながら、カウンターだけのこぢんまりとした店を見つけて、そこに入った。小さな店の割には食べ物のメニューも豊富な店だった。

カウンターに座つて二人で日本酒を飲んだ。なんかこの店にはそれが相応しいように思ったから

だ。食べ物はどうすぐラストオーダーだと急かされたので、一通りのものを頼んで乾杯した。

ほろ酔いだった渚くんは、杯を重ねると僕より早くに酔っ払った。

「甘井さん、甘井さんが『出る』言うたから出ましたよ」

珍しく、渚くんがちょっと絡むような言い方をしてきた。日本テレビの『24時間テレビ』の事だった。以前に渚くんからこの事で相談を受けていた。昔の『ボキヤブラ天国』の同窓会のような形で出演のオフアアが来ていると。そして出るべきか出ないべきか悩んでいると。その時に僕はこう答えた。

「渚くんがこれからの人生で『芸人』以外の生き方を選ばないのであれば、絶対に出るべきだ。芸人なら人前に出てナンボだと僕は思うよ。人生って良いときも悪いときもあるけど、それを全て晒け出して行くのが芸人としての生き方じゃないのかな」

ボキヤブラ出身の芸人さんたちの中には売れている人も居れば、売れない人もいる。フオークダンスDE成子坂でひとつの頂点を極めた感のある渚くんは、一般視聴者にとっては後者となるだろう。それでもバイク事故後にビートたけしさんがあの顔で会見をしたときに、僕は、流石だ、と感じた。芸人というのは生き方まで含めて芸人だと思う。渚くんは本当に酔っ払っているときと麻雀をしているとき以外はずっと「芸」の事ばかり考えている男だ。堂々と出るべきだと僕は思った。それに相談と言いながらも渚くんの口調は、誰かに背中を押して欲しそうに思えたからだ。

「色々言われましたわ」

24時間テレビへの出演は渚くんにとってあまり心地良いものではなかったようだ。でも、それは予想できたことだ。

「芸人としてのありのままの自分を見せることに、恥ずかしい事なんてないよ」

僕がそう言うと、

「解っては居るんですけどね。それでもへこむんですよ」と、渚くん。

僕はここで、無責任に背中を押して悪かったね、の言葉だけは彼に言うてはいけないと思った。今でも僕は彼が出るべきだったと思うし、それに、かれはここを起点に這い上がって行かねばならない人だ。

「へこむということは、自分の生き方に自信がないからだよ」

敢えて冷たく言うと、

「いや、『お笑い』に関しては、自信ありますよー!」

と怒気を含んで返ってくる渚くん。今の彼に必要なのは、その怒りを力に変えることだと思った。僕はもう一度、芸人以外の生き方をしないのなら尚更、客前に、テレビに、どんどん出ていくべきだ、と渚くんに話した。渚くんを待っている人が居る。渚くんに笑わせて貰った人たちが期待し

ている。その人たちのためにも。

渚くんには完璧主義者の一面がある。でも、これは彼自身に教えて貰った事だが、「お笑い」は最高の庶民娯楽、絵画やクラシック音楽のように完成度を高めて披露するのも大事だが、時代に即して出て行かねばならない。それが笑いや流行音楽のような庶民娯楽の宿命だ。

「渚くんはこれからもっともつと芸を磨いていくんでしょ？ その長い歴史の中で、ちよつとへこんだ位で立ち止まったり後退している場合じゃないんじゃない。きつと過ぎてしまえば『ああ、あんな事もあったなあ』って笑い話になつていくよ」

「すいません。ホンマは解つてるんです。でも誰かに愚痴りたかつたんですわ」

「僕で良ければいつでも聞くよ。それに今の事務所は後輩ばかりだしね」

「ええ。しつかりせにやいかんですよね」

「渚くん。スターの条件つて知つている？」

「スターの条件？」

「時代に生き、時代を愛し、時代に愛されること」

「誰の言葉ですか？」

「アントニオ猪木さん」

「エエ言葉ですねえ」

「渚くんはこれからどんどん良くなるんだから、時代を愛して、愛されないと」

「うん、そうですね」

「応援してるよ。まずはMー」

「いや、それはホンマに頑張りますよ」

話しているうちに元気を取り戻してきた渚くん。僕にも経験があるが、自分自身で答えが解つていても、誰かに聞いて貰つたり、誰かと話し合つたりしないと不安で落ち着かない時がある。僕が僅かでも彼の役に立つたのなら、それは嬉しい事だ。それにここ一年は、どんなに飲んで酔っ払つても、最後は前向きな話になることが多く、僕自身、前を向いてる彼の背中を押してあげよう、と考えることが多かつた。

色々、真剣な話をした。気が付けばお互いに眠くなつていた。店はどうに看板で、無理を言つてもう一杯だけと長居していた。僕も渚くんも「飲み」のモードに入つてしまふとほとんど何も食べなくても平気になつてしまふ。慌てて注文した料理もほとんど手つかずだった。

「勿体ないですねえ」

と渚くんが言つたので、無理言いついでにマスターに料理をお持ち帰り用に包んで貰い、渚くんに渡した。

「明日の朝、起きてからチンすれば大丈夫だよ」

「ホンマ、なんか飲んで帰ってきたオヤジみたいですね。こんなんようおりますよね」

包みを持った渚くんはそう言って笑った。

夜風が心地良かった。二人で千鳥足で駅まで歩いた。駅でタクシーを拾って僕は乗り込んだ。

「渚くん、じゃあまた」

「ええ、お疲れさまです」

そう挨拶を交わして、タクシーは走り出した。

後ろを振り返ると渚くんがこちらを見送ってくれていた。僕も手を振った。

これが彼を見た最後の夜になってしまった。

最後の電話

二〇〇六年十月半ば。渚くんからの電話があった。

「この前はわざわざ武蔵小山まで来て貰うて、ありがとうございます」

あの夜には少しへこんだ所を見せていた渚くんだったが、電話の声は明るく、すっかり元気になったようだった。

「あの、前に言うてはったあのアイドルのDVDとかの話」

「うんうん」

「マネージャーの平井さんには一応話は通しておきましたから大丈夫です。せやけど、今、M-Iの関係で忙しくて…」

「大丈夫、大丈夫。M-Iの方が大事、大事。M-Iが終わってからゆっくり考えよう」

「今年は気合い入ってますから」

「優勝するんだもんね。優勝したら祝勝会だ。渚くんは何が食べたい？」

「うーん、やっぱり寿司がいいですねえ」

「そんじゃ、佐野くんも呼んで、またウニを食べようか？」

「ハハハハハ。あれはもうエエですわ。もっとイイところ連れてってくださいよ」

「じゃあ、喜一とか行こうよ。楽しみにしているから」

「ええ、頑張ります」

思い出せる範囲で思い出した渚くんとの最後の会話だ。

その後鼻エンジンは下馬評通りM-1グランプリ二回戦を突破。

順調に行けば、渚くんはフォークダンスDE成子坂でコント、鼻エンジンで漫才と、お笑いの大きな頂を二つ征した前人未踏の芸人となる筈だった。

二〇〇六年十一月十一日。村田渚急逝。

渚くんは前日までレギュラーであったラジオ番組に出演を果たしていた。

それは、誰もが、そしてきっと本人さえも信じられないに違いない出来事だった。

荏原警察からの帰りに

三重の加太へ帰っていく渚くんを、僕たちは荏原警察の周りで茫然と見送っていた。

佐野くんに声を掛けられ、とりあえず渚くんが暮らした武蔵小山の駅まで歩こうという事になった。

カメラマンの河村さん、元マネージャーの門間さんと連れだつて、重い足取りで歩を進める。この三人が顔を合わせるのも随分久しぶりなのだが、その時にはそんな事を考える余裕もなかった。

武蔵小山の駅前に着き、どこかの店に入って腰を下ろそう、と佐野くんに伝えた。佐野くんは急いで何軒かを回り、中華料理屋のテーブルが空いていると皆を誘導した。

桶田敬太郎さん、コアラ（現・ハッピーハッピー）さん、フォークダンスDE成子坂の初代マネージャーだったホリプロの曾川修二さん、門間健一さん、河村正和さん、佐野くん、HEY！たくちゃんこと藤谷くん、そして僕の八人がテーブルに腰を下ろした。誰もが突然の現実を受け容れられないで居た。僕は渚くんの分のコップを貰い、彼の席を作った。皆、日本酒で、渚くんのために献杯した。また涙が溢れてきた。

桶田さんとコアラさんは、やり場のない怒りに似た感情を必死に押し殺しているように見えた。畑違いの友人だった僕とは違い、彼らはいわば渚くんの戦友である。そして、彼が誰よりもその才能

を愛した桶田さんと渚くんの、常人の考えを遙かに越える二人の關係に、僕は口を挟む資格すらない。僕は彼らの全盛期の最後を目にすることが出来た。それだけでこの素晴らしいコンビから多くのものを貰ったと思う。桶田さんは僕の事など覚えていないだろうが、桶田さんに会うのはフォーグダンスDE成子坂が解散して以来だった。もちろんその時にはそんな事も考える余裕は無かったのだが。一同の重い雰囲気、曾川さんが口を開いた。

「絶対に渚って、自分が死んだって気付いてないよ。きっと今も、『なんでみんな居るの?』って驚いている筈だよ」

と、切り出してくれたお陰で、皆は色々と渚くんの話を始めた。このメンバーでは僕は二番目に年長なのに、上手いこと話せず、何か言う度にやたら涙がこぼれた。

誰もが、こんな事があつてたまるか、という現実を、どう自分の中で整理しようか、必死だったと思う。

僕の右横が渚くんの席。そして正面に座って居たのは藤谷くんだった。藤谷くんは自分がどれほど渚さんが好きで、渚さんのお世話になったか、僕と同じようにボロボロ泣きながら話してくれた。みんな渚くんが大好きだった。

先程の荏原警察でのもの凄い数の芸人さんたち。そして今。僕は彼がどの位影響力のある芸人だったか、改めて知ることとなった。

藤谷くんが僕に、

「東京でのお別れ会みたいなのは無いんでしょうか?」
と尋ねた。

「きっとあるよ。渚くんはこれ程の芸人だもの。無ければおかしい」
僕はそう返した。偽らざる本心だった。

小一時間ほどして散会した。誰の目も真っ赤だった。

僕と佐野さんと門間さんに河村さん、付き合いの多かった四人が残った。
佐野くんが、

「いつも渚さんと飲んでいた居酒屋があるんです。そこでもう一杯、渚さんと飲みませんか」と提案した。僕たちは一も二もなく同意した。

佐野くんは渚くんと一緒によく座って飲んでいたという席へ僕たちを案内してくれた。彼の好きだったワーロンハイを五つ頼んで、僕たちは再び渚くんに献杯した。

ここに来て、やっと意識がはつきりとしてきた僕は、今まで全く気を遣うことが出来なかった佐野くん、

「本当、大変だったね」
と、声を掛けた。

「大変なんて…なんて言って良いのかわかりません」

複雑な表情を返す佐野くん。

そんなに酒に強くない門間さんが酔い潰れ、すすり泣きを始めた。

「なんでだよ、渚、なんでだよ」

大声で慟哭する門間さん。僕らもつられて、また涙が出てきた。

門間さんはもう独りで立てない、歩けないような状態だった。河村さんと一緒に門間さんの肩を抱え、駅のホームまで運んだ。河村さんが、方向が一緒だから門間さんを送って行く、と言ってくれた。

僕は佐野くんと二人残った。

「お疲れさま」

「お疲れさまです」

そう言葉を交わしても、疲れたという気分ではない。あんなに飲んでもちっとも酔っていない。

「じゃ、また電話するから」

佐野くんにそう言って駅を後にした。

電車に乗れる気分ではなかった。ふとしたはずみで、さっきの門間さんのように、座り込んで泣いてしまっただけだった。

武蔵小山の商店街をしばらく歩いた。

昔、結婚していた頃、よく買い物に来た見慣れた商店街。それなのに、人の声はやたら遠くに聞こえた。僕は何かを振り払うように足早になっていた。商店街の出口でタクシーを拾って帰宅した。家に帰ったら、やつぱりまた泣いてしまった。

翌日、目を腫らして、でも溜まった仕事を片付けていた。グローバルヴィジョンで連載を持っていた河村さんが、これを使って欲しい、と昨年のM-1での鼻エンジンの写真を持って来てくれた。僕も一頁、渚くんのことを書いた。

入校日が重なって、どうしても三重の加太で執り行われる渚くんの葬儀には行けなかった。だから、この記事が僕と河村さんの渚くんに対するせめてもの弔意だった。

佐野くんから第一報が入ったとき、吉本興業の中川さんに、渚くんの死を伝え、今田耕司さんに伝えて欲しいと告げていた。

「甘井さん、そんな大事おおじょう、すぐ吉本のみんなに回状を回しますよー！」

と、中川さんは言ってくれた。僕はまた、渚くんがどれほど大物だったのか知った。

僕の願った通り、今田さんは献花してくれた。

アントニオ猪木さんの関係にも連絡を取った。猪木さんも献花してくれた。

富田さんから連絡があった。彼女は荏原警察で渚くんと会えなかった事をもの凄く悔いていた。

「あまちゃん、私、加太に行つて来ようと思つてる」

「うん、それが良いと思う。でも、僕はどうしても行けないんだ。僕の方までお願い」

「わかった。また報告するね」

フォークダンスDE成子坂を、渚くんの才能を誰よりも愛していたお笑いライターの富田陽美さん。彼女にとつてこの選択は当然だった。

仕事に追われながら、葬儀の時間、三重の方に向かって手を合わせた。渚くんの写真や、文章などを触る度に涙がこぼれた。

葬儀の様子を富田さんは教えてくれた。もの凄い数の花で、家の前の道の両側に並べても延々と続くほどだったという事。思っていたよりも遙かに加太はのどかな雰囲気のところだったという事。僕は富田さんの言葉から、渚くんの実家である加太を想った。

それから数日も経つと、いつものような毎日は、否応なしに僕を急ぎ立て、相変わらずの生活サイクルに戻った。でも一つだけ、決定的に違う事があつた。もう渚くんが居ないという事だ。僕は絶望感に近い感情に支配された。

加太への旅

渚くんの四十九日忌に僕は加太に行くことに決めた。

僕にとつても、やはり葬儀に出られなかったことが心の隅に引っ掛かっていたし、気持ちに整理を付けたかつた。それに、富田さんが話してくれた加太に一度行かなければ、という想いもあつた。新幹線に乗つて名古屋まで。そこから急行に乗り亀山まで行き、各駅停車に乗り換えて加太へ向かう。ローカル線に乗ると次第に窓の外は田園風景ばかりになってゆく。愛媛県西条市出身の僕にとつて、この風景は郷愁を誘うものだった。

加太の駅に着くと、そこは想像していた以上ののどかさで、びっくりしてしまつた。駅からタクシーにでも乗つて渚くんの実家まで行こうと考えていた僕にとつて、予想外の状況だった。そう言えば富田さんは、三十分位かけて歩いて行つた、と話してくれた。僕もそうしよかなと思つていたときに、一台の車が駅の方に来て来た。亀山市青少年補導センターの巡回車だった。僕はタクシーの呼び方を聞こうと思ひ、車を止めた。

「タクシーを呼びたいのですが、どの会社に電話すれば良いでしょうか？」

「タクシー？ ここまでなかなか来てくれないよ。どこへ行きたいの？」

「あの、法事で村田渚さんのご実家に……」

「ああ、あのタレントの村田さん」

「ご存知ですか？」

「あの葬儀は凄かったからねえ。じゃ東京から来たの？」

「そうです」

「まあまあ遠くから。よし、送ってあげるから乗っていきなよ」

思わぬ所で優しい心に触れた。渚くんあの性格は、こんな優しい人たちが住んでいる場所で育まれたのだ。亀山市青少年補導センターの補導員、廣森宏一さんと田辺さんの親切には本当に助けられた。ありがたかった。

渚くん家に着いた。もう法事は始まっており、読経が聞こえる。

渚くんのお母さんに挨拶をした。そして親戚の方々に挨拶をした。

仏壇には渚くんの遺影が見えた。

「渚くん、来たよ」

と、心の中で彼に告げた。

渚くんにお線香をあげた。

戒名は『微笑一道居士』。

この戒名のことは、案内などで知っていたが、改めて位牌を前にして見ると、何て渚くんに対応

しい戒名なんだろうと嘆息した。父、親戚、友人などいろいろな葬儀の場に立ったが、戒名に感心したのは初めての経験だった。

読経が終わり、お母さんや親戚の方々といろいろな話をした。渚くんのファンの子たちがよく訪ねて来てくれるのでなかなか家を空けられないという話も聞いた。そのファンの子の一人が持って来てくれたという渚くんの写真は膨大な量だった。

「でもね、悲しくなってしまうから、まだよう見んのですわ」

とお母さんは言い、またちよつと悲嘆に暮れた。

「ほんま、こんな事になってしまつて。もつと早う戻んてくれれば良かったのに」

というお母さん。渚くんのことだ、どんなに自分が頑張っているかをいちいち母親に説明することなど無かった筈だ。僕が知っている範囲だけでも、彼はもの凄く「芸」に対して真摯であったし、努力を続けていた。それに多くの人たちに愛されていた。僕はそれをお母さんに知って貰いたかった。

「年が明けたら一度東京へ行こ思ってます」

お母さんがそう言ったので、僕は、

「その時に、東京で渚くんのお別れ会のような事は出来ないでしょうか？ 全てこちらで準備しますから」

と願い出た。渚くんほどの男が、東京での惜別の会が無いのには、僕は納得していなかった。「ええんですか、そんなんして貰もらって」

とお母さんは言ったが、本当に誰もが望んでいたことなのだ。僕はお母さんに約束した。そして渚くんの遺影とお位牌を持って来て欲しいとお願ひした。

その後、渚くんが好きだったという親戚の鰻屋さんに連れて行って貰い、鰻をご馳走になった。

「渚が、これが好きでねえ」

と、お母さん。

渚くんの一番の心残りはきつとお母さんの筈だ。お母さんに頑張っていた渚くんの「芸人」としての真の姿を見て貰いたいと思った。僕にはちよつとした使命感が芽生えた。

その後、関の街道を案内された。渚くんが通学路に通っていた道だという。何とも言えない風情のある道だ。そこでお土産まで買っていただき、急行の止まる亀山駅まで送っていただいた。

渚くんの地元、実家、好きだった店、通学路などを見て、より渚くんが身近に感じられた。生前にはこんな事無かったのに、気が付けば渚くんのことばかり考えている。人が心の中で生き続けるという話を聞いたことがあったが、それはこういう事なんだろうなあ、と帰りの電車の中で思った。

加太に行って本当に良かった。



渚くんの通学路だった「関の街道」

東京に帰って来てからは忙しかった。渚くんのお別れ会に関しては、彼の活躍時期がホリプロとSMAに跨っているため、どちらかが主催で執り行う訳にはいかないという事情も知っていた。それでも元ホリプロの門間さんに交渉の労を執って貰った。その結果、有志代表という形で僕が主催するのであれば、ホリプロもSMAも協力をするという所まで話は進んだ。

問題は会場だ。もう既に日付は年末年始に食い込んでおり、一番の課題となる筈だった。僕はダメモトで渚くんとの思いもあるアートカフェの鈴木正勝さんをお願いした。僕の会を設けたいという想いをじつと聞いていた正勝さんは、快諾してくれた。

「フォークダンスDE成子坂は僕にとっても無縁じゃない。それにそういう会をやるうという甘井さんの気持ちに応えてあげたいと思う」

そういつて正勝さんは僕の無理を聞いてくれた。実に十二月三十日。滑り込みで会場が決定した。僕が帰る間際に正勝さんが、

「今年は紅白、会場に行かなくて良いから、ここで見ようと思ってるんだ。良かったら甘井さんも一緒に観ようよ。ほら、秋川さんも出るんだし」

と声を掛けてくれた。僕は大きく頷いて、アートカフェを後にした。

翌日、佐野くんに会った。芸人さん関係の連絡は彼に一任した。お伝えするにも筋や順番がある。そんな事など全く分からない門外漢の僕は、彼が居てくれて本当に助かった。佐野くんにも司会もお願いした。佐野くんは、

「じゃあ松つんと一緒にやりましょうか」

と、松丘くんと一緒に司会をする事を引き受けてくれた。

本当に精神的に、ここ数カ月、僕より佐野くんの方がヘビーだったろう。あれから一カ月ほど地方で連泊しなければならぬ仕事が入っていたから、逆に気分転換になって助けられた、と彼は言った。それでも夢の中に渚くんが出てきて、飛び起きるような事もあったという。

SMAとの打ち合わせは年明けとなった。一段落した僕は、紅白を見るためにアートカフェへと向かった。最初は正勝さんの表情を見ている方が楽しかった。ホリプロで手掛けた歌手が歌う度に正勝さんは我が事のように緊張していて、上手く歌い終わると喜び、失敗すると頭を抱えた。ああ、芸能の仕事ってこんな感じなんだな、と僕は人気絶頂のフォークダンスDE成子坂を舞台袖から見守っていたであろう曾川さんや門間さんのことを想った。

いよいよ紅白も佳境となり、大御所である和田アキ子さんの後という、初出場では異例の場所に披露された僕の幼馴染みである秋川雅史さんが登場する。『千の風になって』はいつも詩の朗読から始まる。この日は何と、国民的スターの木村拓哉さんが詩を朗読した。これ以上ない舞台で秋川さ

んが歌い始めた。今まで何度となく彼のステージや出演番組を観て来たが、これ程ドキドキしながら彼の歌うのを見守った経験はない。しかし中盤で正勝さんが、

「いいよ、良く歌えている。いい感じだ」

と、声を掛けてくれ、ちょっと安堵した。

この年の三月にライブハウスで秋川さんの歌う『千の風になって』を聞いた時には、先月に他界した父のことを想った。そしてこの日は当然渚くんのごことが胸にこみあげてきた。

偶然だが、渚くんのお母さんも紅白を見ながら、この歌は渚の歌や、と思いい、胸が一杯になったという。日本中できつとそんな気持ちで一杯になった人が多く居た筈だ。翌年『千の風になって』は売上百万枚を突破し、最高のヒット曲となった。

「良かった。間違いなくこれは売れる」

秋川さんの歌が終わると、正勝さんはそう力強く言った。

秋川雅史さんという三歳からの友人が大仕事を果たしたこと、そしてもう一人の掛け替えのない友人が千の風になってしまったこと、いろいろな気持ちの入り交じった複雑な心境で、僕はただ泣いていた。

紅白も終わって、すっかりご馳走になってしまった僕は、正勝さんに礼を言いアートカフェを後にした。

外は寒かった。携帯に新年早々飲んでいる友人たちの声。僕は麻布十番の飲み屋に向かった。僕の一生忘れないであろう二〇〇六年はこうして暮れ、喧騒の中で二〇〇七年が始まった。

年明け早々、SMAを門間さんと二人で訪ねた。NETプロジェクトのトップである平井精一さんときちんとした形で話すのは初めてだった。しばらく平井さんと渚くんの話をした。渚くんが僕といういろいろな人たちを繋げてくれているような気がした。

平井さんは撮り貯めてあった鼻エンジンの映像を全て渡してくださった。門間さんからは『自縛』の全巻を頂いた。恥ずかしい話、僕が持っていた『自縛』のビデオは知人に借りパクされてしまっていた。平井さんから、

「若手芸人を早めに行かせるので色々お手伝わせてやってください」

と、言っただけだった。ありがたかった。

ここで渚くん最後の出演となったラジオを聴かせていただいた。そんなのを聴いて渚くんの話をしていると、今にも扉の向こうから、

「ちわっーす」

と、渚くんがやって来るような気がしてきた。

ファンの人への告知は、SMAのホームページに載せて貰えることになった。それでも会までに僅かな日にちしかなかったので、僕は渚くんファンサイトである「むらたや」にメールを送った

り、2ちゃんねるに書き込んだりした。少しでも多くの人にこの会を知って貰いたかったのだ。お母さんが渚くんの遺影とご位牌を持って来てくださる。この期を逃せば東京で渚くんと惜別する機会は二度とはなかった。

会の名前は「芸人 村田渚を偲ぶ会」とした。「偲ぶ会」とした方が良いと教えて下さったのは正勝さんだ。僕はどうしても「芸人」という言葉を入れたかった。渚くんがこだわり続けた仕事だから。彼にはこれ以外の形容詞は似合わない。最初は「芸人・村田渚」と書いていたが、僕の親友で建築家の松ちゃんこと松本耕司さんに、そういう場合には「^{ナカ}」は使わない方が良い、と教えられ、この名称に落ち着いた。松ちゃんも渚くんとは何度か飲んだことがあり、新年早々、会の下準備を手伝ってくれた。

まず看板を作った。正月だからやってくれる業者もなく、松ちゃんが白無垢の看板を買ってきてくれて、二人で拡大コピーをトレスしながら塗って作った。カメラマンの河村さんが何点もの渚くんの写真を持って来てくれた。これはパネルにした。そしてフォークダンスDE成子坂の『自縛』と鼻エンジンのライブを会で流すようにDVDに編集した。これが一番辛い作業だった。一人でコツコツやっていたのだが、テレビに映る渚くんの顔を見ているとふとした拍子に胸が一杯になって泣けてくる。それでも渚くんの「芸」は一流だ。そんな気分なのに、渚くんのツツコミに笑わされる。泣いたり笑ったり、傍から見れば滑稽な姿で僕は作業を続けた。お母さんの事を思っ、「死」を連

想するような内容のネタは外した。どちらを先に掛けるか悩んだが、鼻エンジン、フォークダンスDE成子坂の順番にした。それが相応しいように感じたからだ。

そして、一月六日、渚くんのお母さんとお姉さん、義兄になるお姉さんの旦那さん、甥に当たるお姉さん夫婦の息子である翔くんが上京された。この日は渚くんのマンションの片づけをするという事だった。そちらには富田さんがお手伝いに行く聞いていたので、会の準備に大わらわだった僕は、翌日に佐野くん、松丘くんと一緒に食事をしましょう、と約束をして準備を続けていた。

その日の夜、お姉さんから電話があった。お母さんが倒れたというのだ。
「とにかくすぐに行きます」

と、電話を切って、ホテルに駆け付けた。

お母さんは一度救急車で運ばれ、もう戻られてお休みになったとの事で、お会いすることは出来なかった。お姉さんと僕は初対面だった。

「母の身体が心配なんで、明日の状況によっては、そのまま加太に帰ろうかとも思っているんです」と、お姉さんはおっしゃった。当然の話だ。

お母さんが居られなければ会を行う意味がない。僕は会の中止を覚悟して帰路についた。

それでお母さんは翌日、気丈に回復された。日中、富田さんがずっと付き添ってくれたのも大きい。予定通りその日の食事会、その翌日の偲ぶ会は出来ることとなった。

ホテルにご家族をお迎えに行つた。お母さんとの再会。お母さんは渚くんのお遺骨を東京にお持ちになつてくれていた。

「渚と一緒に来ようと思つて」

渚くんが居るようで、僕も嬉しかった。

食事はあの今田さんと偶然会つた『鮎の喜一』でという事にした。上座に渚くんの遺影とお位牌、お遺骨を据えた。

「渚くん、嬉しいやろ、この店に戻つてきたで」

お母さんが渚くんに声を掛けた。僕も同じ気持ちだつた。

食事会では佐野くんと松丘くんがご家族を、特にお母さんを気遣いながらその場を盛り上げてくれた。初めて間近で接する松丘くんは、本当に素晴らしい人物だつた。渚くんが最後の相手として彼を選んだ理由が解つたような気がした。心なしか、渚くんの遺影が微笑んでいるように感じた。

「こんな人たちがやつてくれるんやったら、頑張つて出ますわ。なんか湿つぽなつたら落ち込んでしまうけど、今日の松丘さんや佐野さんの話聞いていたら、ちよつとは元氣出ましたわ」

帰り際にお母さんはそう言つてくれた。全ては松丘くん、佐野くんのお陰だ。

翌日、松丘くんは渚くんの甥っ子の翔くんを東京見物に連れて行つてあげた。松丘くんのナチュラルな優しさは、本当に凄いな、と思う。彼が渚くんの相方で本当に良かった。舞台上で渚くんがあ

まりにも面白くて思わず吹きだしてしまうこともあつたという松丘くん。カメラマンの河村さんは、そんな部分も含めて、鼻エンジンは最高に面白かつた、と僕に言つた。返す返す、生で鼻エンジンを観たかつた。

この日、献花用の花を忘れた人のために、僕は花屋で菊の花を五十本買った。でもそんな心配は杞憂だつた。偲ぶ会の準備が整う頃には、アートカフェは多くの花束を持った人たちで幾重にも囲まれていた。

松丘くんの挨拶、佐野くんの司会で会は始まつた。多くの人で溢れる店内。「これが本当の渚くんですよ」そうお母さんに伝えたかつた通りに、芸人さんたち、関係者、ファンの方々に店内は埋め尽くされた。渚くんとの最後のお別れが出来る機会。どうしても来れなかつた人たちは花や電報や友人に託して渚くんへの想いを伝えた。「渚くんはこんなに多くの人に愛されてたんですよ」お母さんにどうしてもそれだけは伝えたかつた。「渚くんはどんな時にも一所懸命、前を向こうとしていました。だからこんな多くの先輩たちから可愛がられ、後輩たちから慕われ、ファンから愛されていたんですよ」。

佐野くんの段取りで、色々な方が渚くんについて話した。イジリー岡田さんは遺影に向かつて話し掛けながら、

「イジリーさんに連れられて行つちやつた、ってゴールデンで言つて貰つて嬉しかったよ、ありが

とう渚」

と、渚くんに感謝の言葉を送った。

曾川さんは高校生時代のネタ見せでホリプロに通っていた頃の渚くんの話をした。フォークダンスDE成子坂の二人の才能は、既にその頃から、プロの目から見ても突出していたそうだ。

テレビで見たこともある芸人さんたちが、渚くんとの思い出を語る。僕の知らない渚くんの姿がそこにはあった。

双葉社の原田さん、門間さんの話は懐かしい『自縛』の頃の話。彼らの話を聞きながら、色々なことを思い出していた。

のんちん&しのびーこと漫画家の浜口乃理子さんとライターの篠崎美緒さん。マニッシュの頃、よくお世話になった二人だ。渚くんともよく麻雀卓を囲んだ。

大きなスクリーンで鼻エンジンのビデオを上映した。啜り泣く人たちから笑い声が聞こえる。数日前の僕がそうであったように、渚くんの「芸」は深い悲しみの淵にいる人すら笑わせて、力を与える。自分の惚ぶ会を、自分自身で明るくするなんて、彼の芸はどれほど凄いだろう。彼の選び進んだ道に誤りがなかったことを僕は再び確信する。

グラランドピアノの上に作られた祭壇に、お線香をあげ、献花し、両手を合わせる人の列は延々と続いていた。富田さんは渚くんのご家族の側に居て、お線香にも気を配ってくれていた。

色々な方のお話が続く。芸人さんたちは、あくまでも、芸人らしく、自分たちの流儀で渚くんを送ろうとしていた。自分の属する「業界」に愛されていた彼の姿があった。

ビデオはフォークダンスDE成子坂の『自縛』に変わった。流石に黄金期の「作品」だ。ファンの方々が食い入るようにモニターを見つめている。こんな会なのに大きな笑いが起こる。

「凄いや、渚くん」

僕は心の中で呟いた。

会場の様子を見て佐野くんに合図を送った。『自縛』のビデオはちょうど「キャンプ野郎なりに…」で止められた。

「ちょっとちょっと、なんで最後がああ伝説の『キャンプ…』なんですか。もっと他にもイイのが一杯あるでしょうに」

と、佐野くんは言いながら司会を進めたが、ちょうどタイミングが「キャンプ野郎なりに…」で終わったのには、何か渚くんの意志がそこに働いていたような気がする。

HEY！たくちゃんが一杯一杯になりながらも、佐野くんのフオローを受けて、渚くんのモノマネを披露した。

ダイノジさんがエアギターを演ろうとしたが、当然こちらにそんな準備はなく、笑いが起こった。彼らもフォークダンスDE成子坂のライブを観てお笑いを志したという。

会場にはそんな「村田渚チルドレン」とでも言うべき後輩芸人の人たちが多く集まっていた。渚くんが一心不乱に追いかけた「芸」の道は、きつと彼らに継承されてゆく。それぞれが村田渚の魂を受け継ぎ、お笑いの血脈を絶やすことなく、彼の目指した最高の庶民娯楽を作り上げていくのだろう。

松丘くんがマイクを握ると、会場内は静寂に包まれ、皆の視線が注がれた。それでも佐野くんとの「関西弁で」を多用した軽妙なやり取りで笑いを取った松丘くん。彼もまたプロフェッショナルだ。

「これからどうしようかなあ、って思ってるときに渚さんに誘われて。でも渚さんと組んだ一年半は、それまでの十年より大変でした。最初の一月、無茶苦茶怒られましたから。『もう辞めよかな』とまで考えることもありました。渚さんは僕に、『桶田を超えろ！あの天才を超えろ！』と叱咤激励してくれました。渚さんが一番認めていた人の名を出したということは、それだけ僕に期待してくれていたんだと思います。コンビの息もどんだん合ってきて、やる度に手応えを感じていました。それでもね、今みたいな『キャンプ：』とか見せられたら、超えるのは絶対無理！これはもうあの二人じゃないと出せない世界ですよ。芸人続けうか、どうしようか迷いましたが、続けることにしました。これから先、もしかしたら誰かとコンビを組むことがあるかもしれませんが、その時は渚さんのお墓へ行って報告したいと思います」

松丘くんの言葉に、会場から大きな拍手が起こった。

芸人続けるという松丘くんの言葉が一番嬉しかったのは、渚くんのお母さんも知れない。お母さんは、渚くんの分まで松丘くんを応援したい、と常々おっしゃっていたからだ。

松丘くんの後に佐野くんも自分のことを話した。

「今日から芸名を寿しほ司つかさと変えます。これはフォークダンスDE成子坂のネタで使われていた名前なんですけど、凄く気に入っていて、生前から渚さんに使わせて欲しいとお願ひしていました。渚さんは『もしかしたら、また使うかも知れへんから、もうちょい待って』ということでしたが、こういう形になったので、今日から使わせて貰います」

と、改名を宣言した。佐野くんはこの事を桶田さんにも相談し、承諾を得たそう。筋を大事にする佐野くんらしい話。佐野くんは一生、渚くん縁ゆかりの名を背負っていかうと決意したのだ。誰よりも渚くんの側に居た芸人寿司。渚くんもこれから、彼のこと気がなってしまうが、ないだろうなあ、と思った。きつと渚くんは寿司しほつかさの顔を見続けていくだろう。

最後に渚くんのお母さんが皆の前で挨拶をされた。体調如何では会の開催すら危ぶまれた。が、お母さんが渚くんを連れてきてくれたお陰で多くの人が彼とお別れをすることが出来た。本当にありがとうございます。

「こんな大勢に集まって貰うって、あの子も喜んでると思います。あの子は東京が好きで、夢に向

かつて一生懸命な子でした。どうか村田渚という芸人がいたということ、忘れないでやってください」

お母さんの言葉に、啜り泣く声があちこちから聞こえた。そして散会となった。

延べ四、五百人の人たちが、渚くんとの惜別を行った。

お母さんが若手芸人たちに、

「身体だけは大事にせにゃいかんよ」

と、声を掛けて回られていた。胸が一杯になった。

僕は渚くんの義兄さんとホテルに向かい、車をアートカフェに回した。

目黒の方から回ったので、途中、ホリプロの近くを通った。色々なことや、色々な想いが重なる夜だった。

車に、これでもか、という程、渚くんに捧げられた花の数々を詰め込んで、ご家族の車はアートカフェを後にし、渚くんと一緒に加太へと帰って行った。

「あの子が頑張ったのが、よう解りました」

最後にお母さんは、そう僕に声を掛けてくれた。この言葉が聞けて良かった。

去って行く車を見送りながら、僕の肩から、ここ数カ月間、張り詰めていた力が抜けた。

本当の意味で、僕自身も、これでやっと渚くんを見送れたのかも知れない。

会場の中に戻ると、

「お疲れさま」

と、正勝さんが声を掛けてくださり、関係者用の小宴の準備が出来ていた。車を待つ間、ご家族と一緒に、スタッフを務めてくれたSMAの芸人さんたちが待っていてくれたのだ。

「本当にありがとうございます」

正勝さんに、SMAの芸人さんたちにお礼を言った。

しばし若手芸人さんたちと話をした。誰の話からも、どんなに彼らが渚くんのことを慕っていたかが窺い知れた。良い会となったのは、みんなが渚くんに対してそんな想いを持っていたからだ。僕なんてただの切っ掛けに過ぎない。彼の積み重ねてきた事が皆の心を動かしたのだ。渚くんのことだ、多分、

「ごなん、照れますわ」

と、言っているに違いない。

松丘さんと佐野さんに、

「これからはお母さんがもう一人居るつもりで頑張らないとね」

と、話した。それは僕自身にも言い聞かせていた言葉だった。



芸人 村田渚を偲ぶ会

僕は大きく嘆息し、椅子に身を預けた。体中の力がいつべんに抜けた。アートカフェを後にすると、双葉社の原田さんや、松ちゃんや、富田さんが別の店で待っていていた。僕の友人の芸能プロダクション・ルージュの社長である本田正樹さん、熊田曜子、安田美沙子など人気タレントを多く抱えるアーティストハウス・ピラミッドの常務取締役である馬場ちゃんこと馬場基生さんもこの日の会に列席してくれた。本田さんも馬場ちゃんも僕と一緒に渚くんや飲んだことのある人たち。二人とも僕のために原田さんたちと一緒に残ってくれていた。佐野くんと一緒に店に入った。渚くんのためのグラスを用意して、みんなで飲んだ。ここ数カ月、酒を口にすることはあっても、酔うことが出来なかった。でも、この日やっと肩の力が抜け、渚くんと同じように気心の知れた人たちがばかりだったという事もあって、本当に久しぶりに痛飲した。渚くんが側に居るような気がした。

フジテレビの特番

渚くんのお姉さんからメールが来た。フジテレビの「とくだね」という番組の中で渚くんのことを取り上げるらしい。フジテレビの小嶋佳子さんから連絡があるかもしれない、との事だった。

後日、小嶋さんから連絡があり、南麻布の事務所兼自宅までわざわざ訪ねて来てくれた。

小嶋さんは僕が編集した『グローバルヴィジョン』を読んでもらっていた。三月号では『村田渚とその時代』のタイトルで渚くんの写真を表紙に使用した。表紙を渚くんにするのは、僕と渚くん、二人の約束だった。本来なら鼻エンジンがM-1を制して、華々しく登場する筈だった。四月号では『芸人村田渚の魂を継ぐ者たち』のタイトルで、松丘慎吾くん、佐野忠宏改め寿司ことぶくかき、HEY! たくちゃんの三人の渚くんに関してのインタビューを掲載した。予想通りに三月号を出した時には問い合わせの電話が鳴り続けて、編集部はちょっとしたパニックになった。僕が今の仕事で、渚くんのために何か出来ることといえば、こんな事しかなかった。小嶋さんは何度も加太を訪れたそうだ。お母さんから色々な話を聞いたという。僕は小嶋さんに僕が知っている「村田渚」の事を話し、僕が保管していた写真等を託した。良い番組になってくれればいいなあ。小嶋さんが帰った後、そう思った。

四月三日の朝、「とくだね」の中の『温故知人々天国からのメッセージ』というコーナーで渚く



芸人 村田渚を偲ぶ会

んは取り上げられた。さまあらずの三村さん、爆笑問題の太田さんなどのコメントが紹介され、松丘くん、曾川さん、そして渚くんのお母さんのインタビュ어가放送された。「芸」に対してひたむきだった彼の姿を良く伝えてくれた内容だった。そして嬉しかったのは、鼻エンジンの結成によって再び渚くんは輝きを放ち始めたことを伝えてくれた事だ。

「笑いは笑いから生まれる」と番組ではまとめていた。

お笑いの話をする時の、本当に嬉しそうだった渚くんの顔を思い出した。

渚くんは苦悩の中、辛い思いをして死んだんじゃない。最後の瞬間まで「芸」の事ばかり考えながら、明日への希望を胸に抱いていた筈だ。

「今度のコンビはね、本当、自信あるんすよ」

事ある毎にそう言っていた渚くん。

大きな大きな舞台に立つ鼻エンジンを見たかった。

しばらく落ち着いていた僕だが、久しぶりに、その日は朝から泣いてしまった。

ノーブラの字幕

松丘慎吾くんがコントライブを演じることを聞いた。松丘くんからも招待の電話を頂いた。タイトルは「ノーブラ」だという。渚くんの名を冠してネーミングされたSMAの劇場Beach^{ビーチ}Vで二日間開催されるという。ちなみにBeachは渚を意味し、Vは村田の村VILLAGEの頭文字を取ったものだ。初日には渚くんのお母さんやお姉さんも来られるという事なので、僕もその回に行かせて頂くことにした。

コントというと、どうしてもフォークダンスDE成子坂の印象が強い。愛媛県出身の僕は、地元でもネット放送されていた吉本新喜劇を昔から見ている。平三平さんが好きで、登場すると爆笑していた。その後、上京し、コントのライブを幾つか観たが、幼い頃、新喜劇を観て笑った時のような面白さを経験することはなかった。当たり前の話だ。観ている僕の方が変わって行ってるのだから。だけど、フォークダンスDE成子坂を観たときは違った。本当に腹の底から笑えた。子供の頃のように無邪気に、天真爛漫に笑っていたような気がする。フォークダンスDE成子坂をリアルタイムで観られた幸運には感謝している。

BeachVのエントランスにパネルを飾りたい、とSMAの平井さんから頼まれて、『自縛』で使用した五枚のイラストをパネルにして送った。新しい劇場のエントランスを、伝説のコンビが飾

るなんて、何て素晴らしいことだろう。野球殿堂のような雰囲気だ。これからこの劇場で腕を磨いていく若手芸人さんたちは、フォークダンスDE成子坂の絵を見ながら、

「いつか俺たちも」

と、心に期してお笑いの道を進むのだろう。

五月二十六日。久しぶりに渚くんのお母さん、お姉さん、甥の翔くと再会した。お母さんは、

「松丘くんの再起の舞台を渚にも見せてやらにや」

と渚くんのお位牌と一緒に来られていた。

僕も同感だった。きつと渚くんも、松丘くんの事が気になって仕方ない筈だ。

楽しみにしていた「ノーブラ」は思っていた以上にクオリティの高い舞台だった。ベテランの島根さんや石本さんは、その存在感を十二分に発揮し、「響」の小林優介、長友光弘、そしてカンカンという若手芸人さんたちはそんな懐の深い先輩たちに全力でぶつかっている。確かに荒削りな部分もあつたが、ダイヤの原石のような、これからまばゆい光を放つていきそうな予感に満ち溢れる舞台だった。

「迷子」のコントでは、フォークダンスDE成子坂を思い浮かべずには居られなかった。パンチの効いた渚くんのツツコミの声が聞こえてきそうな気がした。

一瞬、そんな事を考えたが、僕はすぐに舞台に引き付けられた。松丘くんが体を張った「ベテラン漫才師」は特に面白かった。「別れ」などは演っている松丘くんが楽しそうで、つられて笑いが込み上げる。回を重ねれば重ねるほど、どんどん良くなりそうな予感。僕自身の今後の楽しみが一つ増えた。

エンディングではスクリーンにノーブラメンバーが跳ね回るビデオが上映された。スタッフロールの最後に、スーパーバイザー…桶田敬太郎、と、続いて、企画…村田渚、と字幕が流れた。感慨深かった。二度と一緒に並ぶことはなかった二つの名が、渚くんの最後の相方であった松丘くんの手によって並べられた。ビデオが終わり、明転して舞台挨拶が始まって、しばらくの間、感無量だった。

村田渚の「芸」に賭けた魂も、フォークダンスDE成子坂の伝説も、松丘くんは受け止めて頑張ろうとしている。胸が熱くなった。と同時に、この芸人らしい粋な計らいに、素直に感動した。

思えば、佐野くんも、渚くん、そしてフォークダンスDE成子坂ゆかりの寿司ことしよしかという名を継いで、その名を高めることで渚くんに恩返しをしようと汗を流し続けている。

渚くんはなんと凄く後輩たちを持っていたのだろうか。

公演後、お母さんたちが泊まっているホテルの一階で小宴を持った。翌日の舞台もあるのに松丘くんと石本さんが駆け付けてくれた。お母さんも、お姉さんも、嬉しそうだった。

「渚のことで松丘くんが芸能界を辞めてしまたら、も一つ悔いが残ってしまふ」

とまでお母さんはおっしやっていた。松丘くんの本格復帰は村田家にとっても朗報だったのだ。「いや、父兄参観みたいで緊張しましたよ」

と、爽やかな笑顔で話す松丘くん。

彼が渚くんの最後の相方で本当に良かった。

翌日、お母さんたちと武蔵小山を散策した。忙しい時間を縫って、寿司が駆け付けてきてくれた。軽く調子よく喋っているようで、実は色々と考えている佐野くん。彼の妻さを理解するまでに僕は時間を要した。富田さんが、

「佐野くんは高田純次さんみたいなタイプだよね」

と言った事があり、これには僕も、成る程、と頷いた。

渚くんは佐野くんに、

「お前は放つといっても大丈夫」

などと、笑いながら突き放したような言い方をする事もあった。

それでも、渚くんは一番佐野くんと一緒に居た。

松丘くんと佐野くん。

この二人のこれからは、僕は渚くんの分まで見続けていようと思う。

『千の風になって』

時間は前後するが、二〇〇六年の紅白歌合戦を起点とした秋川雅史さんの『千の風になって』ブームが二〇〇七年の日本列島を席卷した。

一躍時の人となった彼に、二月八日に大崎でのコンサートの楽屋で会った。

「ああ、あまちゃん。元気？」

人気者となっても彼の態度は、昔から変わらない。

僕はこの日、彼にお願いがあった。紅白で耳にして以来、この歌を、渚くんの歌だ、と聞き続けている渚くんのお母さんに、秋川さんのサインを贈りたかったのだ。

僕は事情を説明し、彼に頼んだ。

「いいよ。是非書きましよう」

と快諾してくれた彼。写真とサインを貰い、僕は加太へ送った。

渚くんのこと、秋川さんの大ヒット。ほぼ同時期に起こった二つのことが、僕の中では不思議な縁で結ばれている。

「渚は千の風になって東京にいるような気がすんですよ」と話してくれるお母さん。

この歌で癒された人が多かったからこそ、この曲は大ヒットとなったのだろう。

「死をどう受け容れるかが大事なこと」

とは、アントニオ猪木さんが僕に話してくれたことだ。

「俺ぐらの歳になりや、仲間ほとんど死んでいくんだよ。でも、この世での務めを無事終えて、新しい世界に旅立っていくと考えれば、死もそんなに怖くはないだろ？ 死に直面すれば誰だって悲しいよ。でもその死をきっちり受け止めて、そこから自分が何を成すべきなのかを考えるのが、残された者の本当の務めだと思うよ」

この言葉は僕に力をくれた。

九月二十四日、伊賀市文化会館で秋川雅史さんは「千の風になってコンサート」を行った。事前に彼と事務所にお願していたので、渚くんのお母さんとお姉さんを秋川さんは楽屋に招き、お話をしたそう。この会場はフォークダンスDE成子坂時代に渚くんが凱旋公演を行った場所でもあるとのこと。不思議な縁を感じずには居られない。

秋川さんは歌で渚くんのお母さんやお姉さんに元気を、力をもたらした。

松丘さんと佐野くんは、渚くんと同じ道を歩み、その姿を見せることで、それが渚くんのお母さんやお姉さんにとって、これからの楽しみとなる。

それじゃ、この僕は何が出来るのだろう。

猪木さんの言葉、残された者の務め、という部分が心に引っ掛かった。

そう、今、僕が出ることと言えば書き記すことだけなのだ。まず書いてみよう。秋川さんに力を貰った、というお姉さんからのメールが届いた夜、そう思っ僕はパソコンの前に向かった。不思議な気分だった。渚くんのことを書いていると、彼が隣に居るような気分だった。

楽しかったこと、辛かったこと、それらを全て含んでも、僕は渚くんと出会い、友達になれて良かった。

本当に良かった。

拙文、最後までお付き合いいただきありがとうございました。

これを読んで百分の一でも渚くんの素晴らしさが伝われば幸いです。



解体された恵比寿参番館

あとがき、渚くんへ

渚くんへ

東京での暮らしはビックリするぐらい日々の変化が早いです。僕や渚くんのように日本中から田舎者が集まる街だから、本当にみんな必死で頑張っています。

渚くとよく麻雀をしたあの恵比寿参番館は、先日取り壊されました。十年住んだ場所が消えてしまった光景は寂しいものがありました。鈴木正勝さんのアートカフェのビルも取り壊されます。でも正勝さんは恵比寿でアートカフェ・パート2を始めるんだと意気軒昂です。恵比寿の開発は急ピッチで進んでおり、しばらくすればあの『鮎の喜一』も移転することになります。渚くんが僕のスコッチに付き合ってくれた麻布十番の『狼庵』は神田小川町に移転しました。あれから一年経ちましたね。渚くんとの思い出深い場所が、一つひとつ消えてゆくような気がしています。でも、これも東京の東京らしい姿なのでしょうね。

渚くん、君の『芸』に向かう真摯な姿からは沢山のものを学ばせて貰いました。覚えてますか、六本木で一度飲んだドージョーチャクリキのメンバーを。僕は相変わらず道場の広報をやっています。今年は二人の選手がプロデビューを果たしました。でもプロといっても駆け出しですからファイトマネーも雀の涙で、その生活費はアルバイトでなんとかしている者がほとんどです。大変な毎日で

しょうが、それでも僕は、プロである以上、気合いの抜けた試合をした選手は厳しく叱咤します。渚くんが自分の生きる場所を舞台、客前と決めていたように、プロとしてリングに上がったら一切の言い訳は通用しないと思います。きっと渚くんも、その通り、と頷いてくれますよね。

僕個人の話をすれば、不惑の四十歳となったのに、まだまだ仕事に悩んだり、ストレスを吐き出せないままで居たりしながら、それでもなんとかやっています。渚くんのように一筋の道を見付け、楽しんでその道を進むという心境には、まだまだ辿り着けません。でも後悔だけはしないようにと考えています。後ろを振り返る暇があったら前へ進むしかありませんよね。

松丘くん、佐野くんの頑張り、目を細めて微笑みながら見ていることでしょう。松丘くんは本当にイイ男ですね。もちろん変な意味じゃなく。一度、三人で話したかったですね。佐野くんは良い意味で相変わらずです。相変わらずの佐野くん居れば、いつか時代が佐野くんを欲するような気がします。

彼、幼馴染なんだよ、と、渚くんに秋川さんの写真を見せたこと、覚えてますか。まさかその秋川さんのコンサートにお母さんとお姉さんが行って、渚くんの話をするなんて、想像も出来ませんでしたね。縁とは本当に不思議なものです。

一年ぶりに加太に行きます。

渚くんに会えることを楽しみにします。

きっと渚くんが会いたかった人たちが来るでしょうね。

渚くんを通じて知り合った人たちは、誰もが素晴らしい人です。

僕も負けないように頑張ります。あまりフラフラしていたら、また渚くんにダメ出しされそうですもんね。

「もうく、しっかりとしてくださいよ」

なんて言わないように。

渚くんが大好きだったお笑いの世界。松丘くんと佐野くんがどんなに面白くしてくれるのか。これからの楽しみです。

最後に何て書こうか迷いましたが、やっぱりこれしか言葉が見付かりません。

渚くん、ありがとう。

二〇〇七年十一月九日

甘井もとゆき